

山添遺跡（第3次）発掘調査報告

～三重県松阪市安楽町・山添町所在～

2003年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

山添遺跡は松阪市山添町から安楽町にかけての範囲に所在しています。西方に広がる丘陵上にはいくつかの小円墳が確認されており、過去の調査からこの丘陵上では、5世紀から7世紀にかけて古墳の築造が行われていたことがわかってきています。

今回報告いたします山添遺跡は、櫛田川の左岸に位置し、平成12年度県営ほ場整備事業に伴って調査を行ったものです。当遺跡での発掘調査は昭和53年度、平成8年度に続いて3度目になります。以前の調査では、主に中世の遺構や遺物が確認されています。今回の調査では中世の溝などの他に、縄文時代の建物の跡がわずかに一棟ではありますが確認されました。また、この建物に伴うと思われるお墓も見つかっています。縄文時代の人々の確かな生活の痕跡が確認されたことは、今回の調査での大きな成果であり、この地域の歴史を考えていく上で大切な資料になると考えます。

しかし、一方でこのような重要な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。これまでに得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもの今後の重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、櫛田上土地改良区などの関係諸機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

2003年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県松阪市安楽町・山添町に所在する山添遺跡の第3次発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本遺跡の調査は平成12年度県営は場整備事業（櫛田上地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施した。
- 3 平成12年度調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課
主事 柴山 圭子
主事 小濱 学
技術補助員 小林 俊之
研修員 川合 圭子
土工担当 (財)三重県農業開発公社
調査期間 平成12年6月19日～同年10月17日
調査面積 1,700m²

- 4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、櫛田上土地改良区、松阪教育委員会からの協力を得た。
- 5 報告書作成にあたっては、伊藤裕偉氏（斎宮歴史博物館）から有益な御教示を得た。
- 6 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および資料普及グループが行った。また、本文の執筆は柴山・小濱が行い、分担は目次および文末に明記した。

「V 自然化学分析」は、(株)パリノサーヴェイおよび中村俊夫氏（名古屋大学年代測定総合研究センター）の分析報告による。なお、写真撮影は小濱が、全体の編集は柴山が行った。各所で小林・川合の補助を得た。

- 7 本書の遺構図面は、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とする座標北を用いた。
- 8 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。
- 9 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。

わん…………… 「椀」 「碗」があるが、「椀」を用いた。
つき…………… 「杯」 「坏」があるが、「杯」を用いた。

- 10 本報告書での遺構番号は通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

S D : 溝 S A : 柱列 S K : 土坑
S H : 竪穴住居 S E : 井戸 S X : 土壙墓
S Z : 落ち込み p i t : ピット、柱穴

- 11 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

I 前 言	（柴山圭子）	1
II 位置と歴史的環境	（柴山圭子）	2
III 調査の成果 ～層位と遺構～	（柴山圭子）	20
IV 調査の成果 ～出土遺物～	（柴山圭子）	24
V 自然科学分析 1 リン・カルシウム分析	（パリノサーヴェイ株式会社）	32
2 ¹⁴ C年代測定	（中村俊夫）	34
VI 結 語	（柴山圭子・小濱 学）	35

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第14図 D地区土層断面図	19
第2図 遺跡地形図	4	第15図 S E 5 出土状況図	21
第3図 調査区位置図	5	第16図 S A 45実測図	21
第4図 A地区遺構平面図	6	第17図 S H 16, S X 22実測図	22
第5図 A地区土層断面図	7	第18図 A地区出土遺物	25
第6図 B地区土層断面図①	8	第19図 B地区出土遺物	26
第7図 B地区遺構平面図	9～10	第20図 B地区出土遺物	27
第8図 B地区土層断面図②	11	第21図 C地区出土遺物	28
第9図 C地区土層断面図①	12	第22図 D地区ほか出土遺物	29
第10図 C地区遺構平面図	13～14	第23図 S X 22遺構覆土の試料採取位置	32
第11図 C地区土層断面図②	15	第24図 リン酸・カルシウム含量	33
第12図 D地区遺構平面図①	16	第25図 縄文集落の遺構配置	37
第13図 D地区遺構平面図②	17～18		

表 目 次

第1表 遺構一覧表	23	第4表 出土遺物観察表（土器）②	31
第2表 出土遺物観察表（石器）	29	第5表 リン・カルシウム分析結果	33
第3表 出土遺物観察表（土器）①	30	第6表 炭化材試料 ¹⁴ C年代測定結果	34

写真目次

図版1 A地区調査前風景・調査区全景	39	図版6 S H 16・S X 22	44
図版2 B地区調査前風景・調査区全景	40	図版7 石組遺構・S A 45	45
図版3 C地区調査前風景・調査区全景	41	図版8 A地区出土遺物	46
図版4 D地区調査前風景・調査区全景	42	図版9 B地区出土遺物	47
図版5 S E 5 出土状況・S E 5 出土状況近景	43	図版10 出土遺物	48

I 前 言

1 調査の契機

今回の発掘調査は、平成12年度県営ほ場整備事業（櫛田上地区）に伴い実施した。山添遺跡は、松阪市遺跡番号352の周知の遺跡である。当遺跡では、昭和53年度に県道豊原御麻生園線改良工事に伴い、発掘調査が行われた^①。また、平成8年度にはふるさと農道整備事業（上川地区）に伴い、発掘調査が行われている^②。今回の調査で当遺跡の第3次調査となる。

調査に先立ち平成11年度に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の51,850㎡については遺構の存在が確認された。

これを受けて、県農林水産商工部と文化財保護の協議を重ねてきた。その結果、農業用水路で遺跡が破壊される1,700㎡について本調査を実施することになった。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

調査区はA・B・C・Dの4地区に分かれる。調査期間は平成12年6月19日～平成12年10月17日である。詳細については「調査日誌（抄）」を参照されたい。

なお、大変暑い日が続くなか、調査にご協力いただいた作業員の方々のご芳名をここに記し、感謝の意を表する。

有滝ノブ子、有滝美津、井阪志げ子、太田千枝、太田はまえ、岡山富美子、小川つた子、奥井久雄、奥田すみ子、鈴木和代、菌部正明、高橋美千子、田所 勇、出口とし子、出口秀子、出口康弘、中西紀美子、中野栄美、脇田昭子

(五十音順、敬称略)

(2) 調査日誌（抄）

6月23日 A地区の表土除去開始。溝を2条確認。遺物量は少ない。
7月3日 B地区の表土除去。
7月5日 A地区から作業員投入。遺構検出。
7月10日 SE5検出、掘削。土師器の鍋がまと

まって出土する。

7月11日 A地区清掃、写真撮影。SE5の遺物取り上げ。
B地区へテントなど移動。
7月13日 萩原技師、小林技術補助員、小濱主事、A地区平板実測（1/100）。
7月24日 A地区引渡し。
7月27日 B地区遺構検出、掘削。SD16から縄文土器出土。竪穴住居か。
8月1日 伊勢市立厚生中学校から教職員研修西村彰剛先生が、本日より3日間当遺跡で体験発掘。
8月3日 猛暑。作業員数減ってくる。SK22は縄文時代の土壙墓か。
8月4日 SD16の床面を精査。壁柱穴を確認する。
8月10日 B地区清掃、写真撮影。平面実測のための振込み。
8月11日 B地区実測。（1/20）
8月21日 B地区下層確認調査。No.1～No.6。明確な遺構は確認できなかった。
8月22日 C地区表土除去。
8月25日 B地区引渡し。
8月29日 C地区遺構検出、掘削。遺構、遺物とも少ない。埴輪片を調査区北側で数片確認。
9月11日 朝から台風の影響で大雨。現場中止。
9月19日 C地区排水。D地区表土除去。
9月21日 C地区清掃、写真撮影。
9月28日 中川主事、筒井主事、濱辺技術補助員、萩研修員の補助を得て、C地区実測。（1/20・1/50）
10月2日 C地区下層確認調査。遺構は確認できなかった。
10月4日 D地区遺構検出、掘削。柱列確認。根石あり。中世土師器皿出土。
C地区引渡し。
10月12日 D地区清掃、写真撮影。道具とテント片付け。本日で作業員終了。

10月13日 伊藤技師、萩原技師、筒井主事の補助を得て、D地区実測。(1/50・1/20)
10月16日 D地区下層確認調査。遺構は確認できなかった。
10月17日 D地区を引き渡して、調査終了。

3 調査の方法

今回の調査面積は、4地区で1,700m²である。掘削は表土については重機で行った。それ以外は人力による掘削である。

今回の調査では、それぞれの調査区がアゼや水路などで分断されており、4m四方の小地区はほとんど設定できなかった。従って、小地区は調査区の方角に沿って設定した。調査区が屈曲する場所では、重複している。

ただし設定は、国土座標とは無関係であり、またそれぞれの調査区の間に関係はない。

調査区の平面図は遺構密度により1/100、1/50、

1/20で、土層断面図は1/20で作成した。また、出土遺物を伴う主な遺構については、原則的に1/10で作成した。

4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項
(県教育長宛)

平成12年5月26日付農基第275号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
(松阪市警察署長宛)

平成13年2月1日付教生第229-15号(県教育長通知)

II 位置と歴史的環境

松阪市南部を流れる櫛田川は、祓川を分流するあたりから左右に広く沖積平野を形成し始める。山添遺跡(1)は、この櫛田川の左岸に位置する。遺跡周辺には田園風景が広がっており、背後には小高い丘陵が南北に続く。

当遺跡では、昭和53年度に発掘調査が行われ、中世の掘立柱建物9棟、石積みの井戸2基などが検出され、中世集落跡と考えられている^③。遺物は古墳時代～平安時代の土器も出土したが量的には少なく、土師器皿・鍋、常滑産の鉢・甕、山茶碗、山皿などの中世の日常雑器類が大半を占めている。他に青磁、白磁、石硯、茶臼などの出土も見られる。また、平成8年度の調査では、中世の溝や土坑が検出されており、少量ではあるが古墳時代や中世の土器が出土している^④。

ここでは、今回の調査に関連する縄文時代と古代、中世の遺跡を中心に、周辺の主な遺跡について若干概述する。

当遺跡の西南には、縄文時代早期の押形文土器が出土する鴻ノ木遺跡^⑤(4)や朱中遺跡^⑥(5)、

射原垣内遺跡^⑦(6)、上寺遺跡^⑧などがある。鴻ノ木遺跡では、早期のほかに中期、後期の遺物も少量出土している。

天照大神の御杖代として未婚の皇女が伊勢神宮に奉仕する斎王制度は、天武朝には確立し、南北朝時代まで600年以上の長きにわたって存続した。多気郡に斎宮寮が置かれ、祓川は飯野・多気の郡境であり、神の近境でもあった。現在、明和町斎宮・竹川に斎宮跡(17)があり、国史跡に指定されている。

奈良時代の寺院跡としては、櫛田川左岸の大雷寺廃寺(18)と貴田寺廃寺(19)があり、どちらも大量の瓦が出土したが、寺域ははっきりしていない。

櫛田川はかつての本流であった祓川との間で乱流を繰り返し、乱流によって形成された自然堤防上に遺跡が点々と分布している。中の坊遺跡(22)は、室町時代の土師器皿・鍋が多量に出土し中世の集落跡が、中心であると考えられる。また、50個体を上回る高杯をはじめ、古墳時代の遺物もまとめて出土している^⑨。古川遺跡(12)では、石組み井戸4基をはじめ鎌倉時代を中心とする集落跡が検出され

た。硯や墨書土器も見つかっており、当時かなり有力な人々が住んでいた可能性がある^⑩。

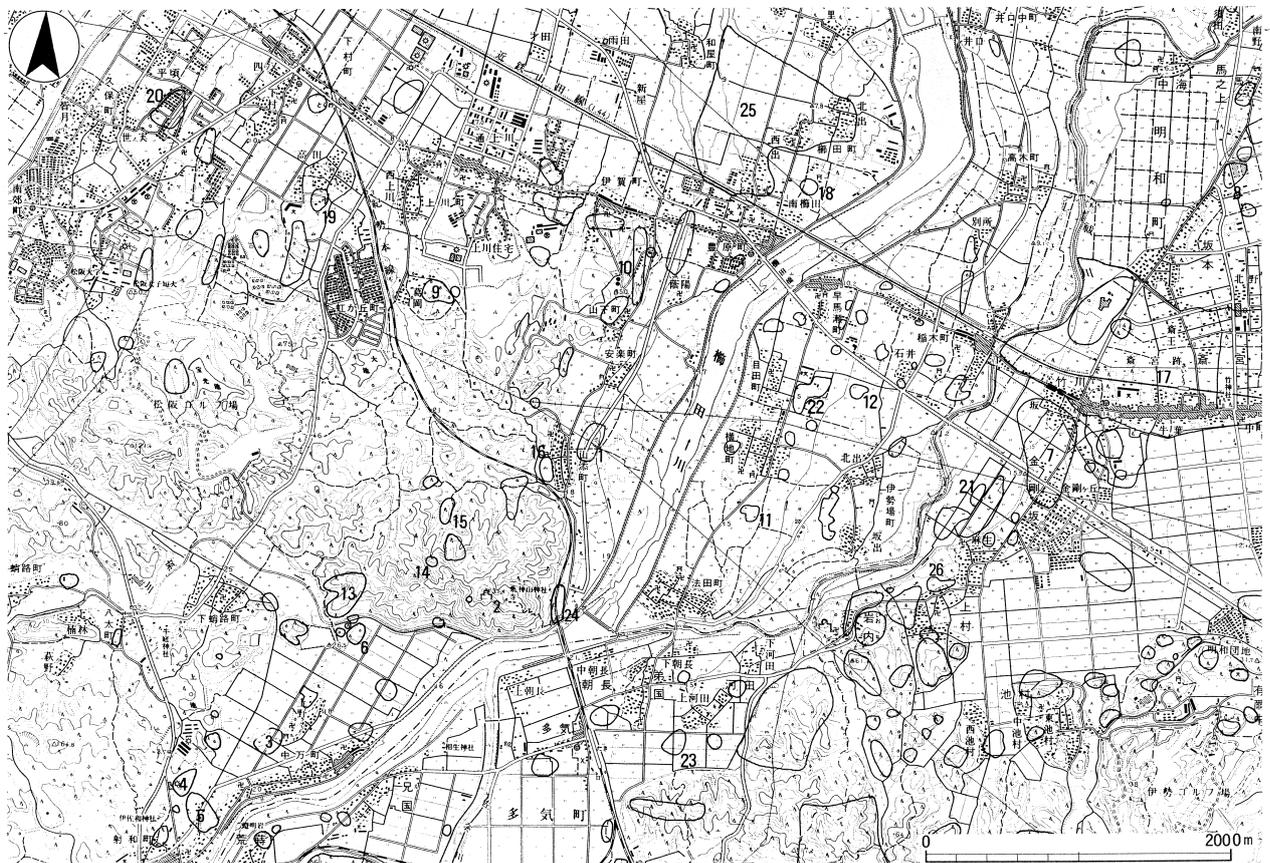
祓川を越えると、「中万」と書かれた墨書土器が数点出土しているカウジデン遺跡^⑪ (23)がある。また、城堀遺跡 (26) では山茶碗や土師器の皿が出

土している溝や土坑が検出されている。また、榊田川左岸の榊田地区においても、榊田地区内遺跡群 (25)として、多くの中世から近世にかけての遺跡が見られる^⑫。

〔註・参考文献〕

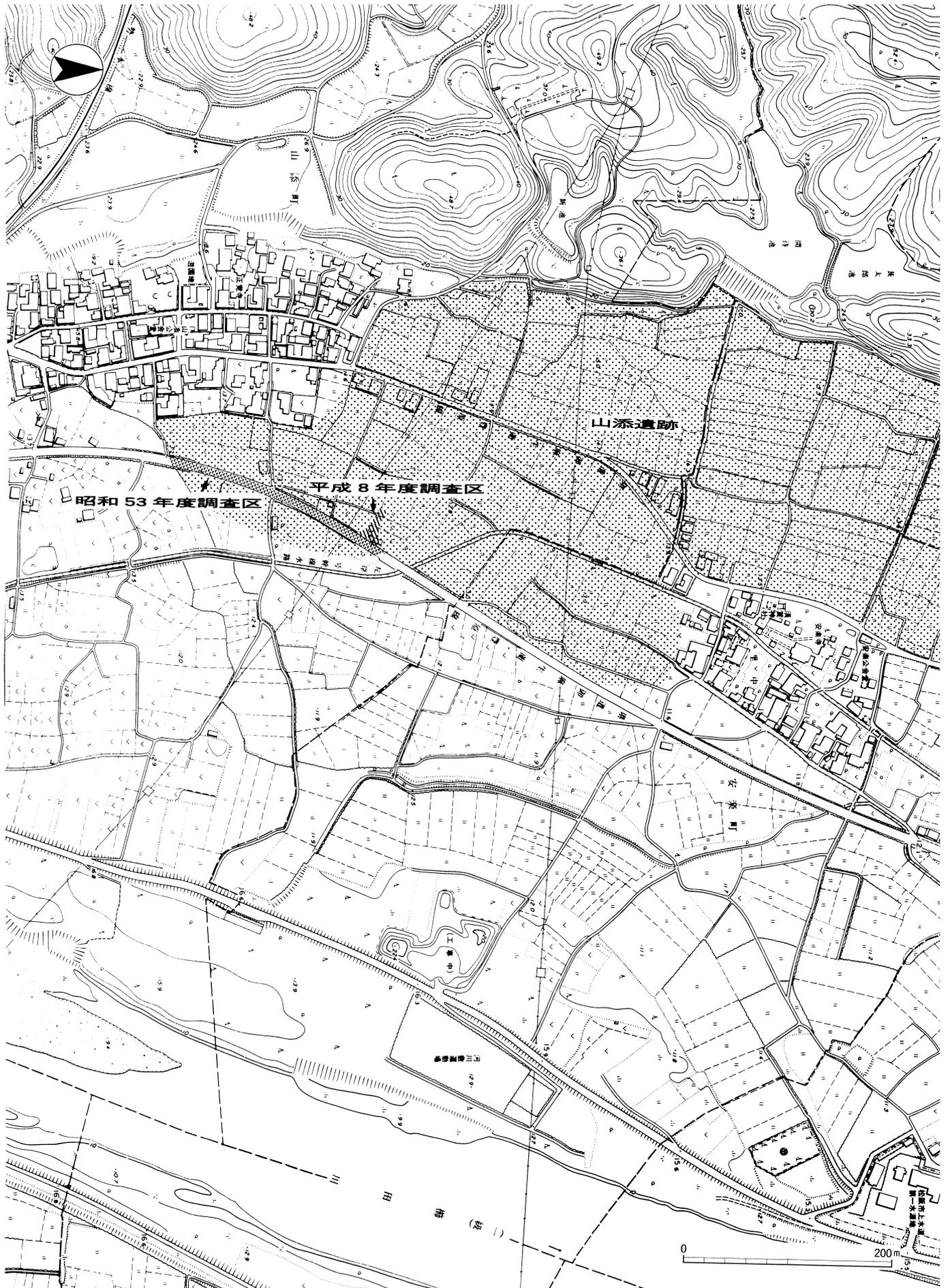
- ① 新田 洋 『山添遺跡発掘調査報告』 (三重県教育委員会、1979年)
- ② 坂倉一光 『山添遺跡 (第2次)・里中遺跡ほか』 (三重県埋蔵文化財センター、1997年)
- ③ 註①に同じ
- ④ 註②に同じ
- ⑤ 小濱 学ほか 『一般国道42号線松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅳ 鴻ノ木遺跡』 (三重県埋蔵文化財センター、1998年)
- ⑥ 小濱 学ほか 『一般国道42号線松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅴ 朱中遺跡・朱中古墳群』 (三重県埋蔵文化財センター、1996年)
- ⑦ 下村登良男 『射原垣内遺跡発掘調査概報』 (松阪市教育委員会、1980年)

- ⑧ 下村登良男・奥 義次 『上寺遺跡発掘調査報告書』 (松阪市教育委員会、1981年)
- ⑨ 伊藤裕之 『中の坊遺跡』 (三重県埋蔵文化財センター、1997年)
- ⑩ 伊藤裕之 『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』 (三重県埋蔵文化財センター、1996年)
- ⑪ 三ツ木貞夫・谷本鋭次 『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 多気郡多気町カウジデン遺跡』 (三重県教育委員会、1980年)
- ⑫ 宇河雅之・袖岡直樹 『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大連寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』 (三重県埋蔵文化財センター、1996年)



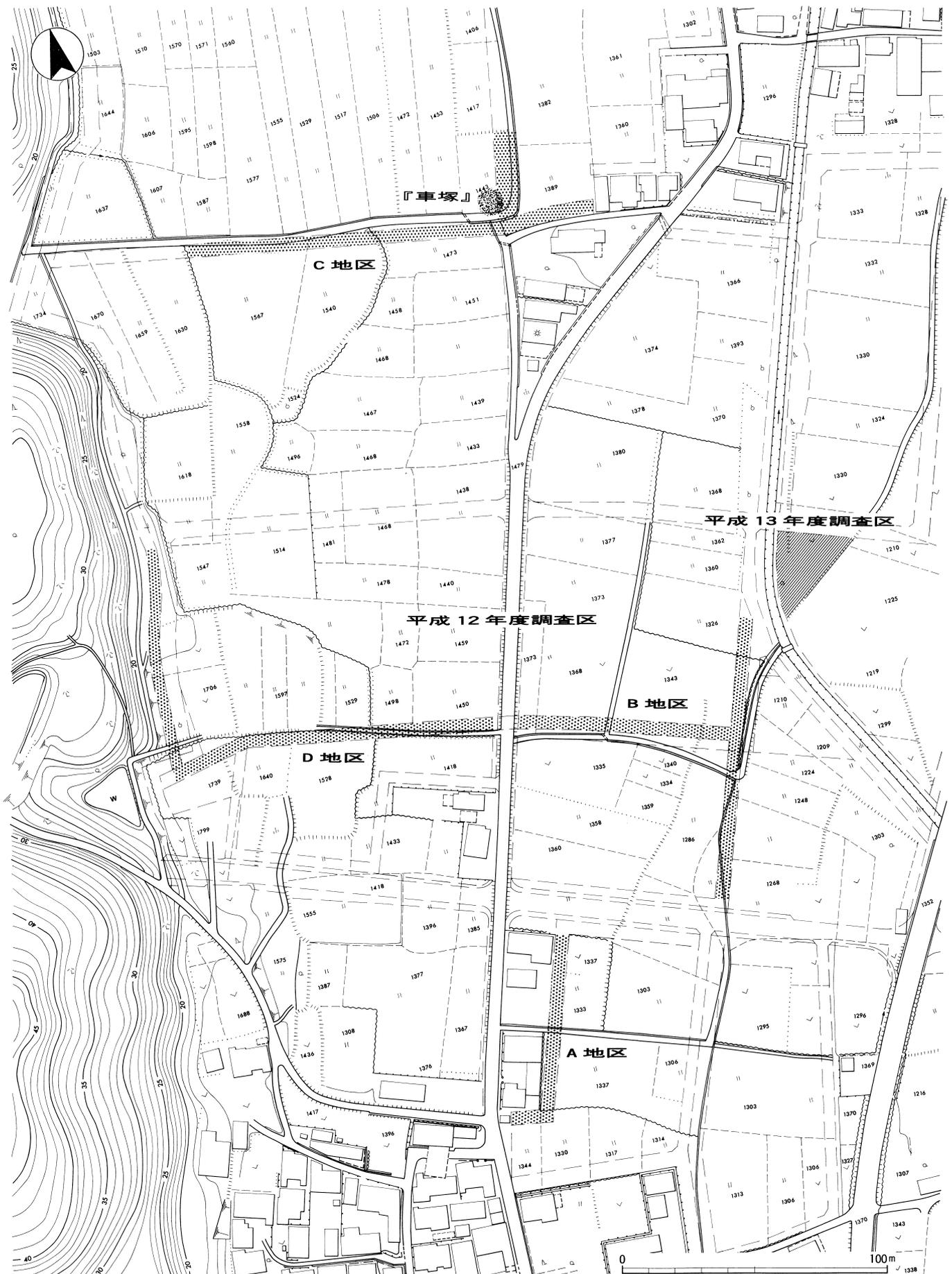
第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

国土地理院『松阪』(1 : 25,000)より

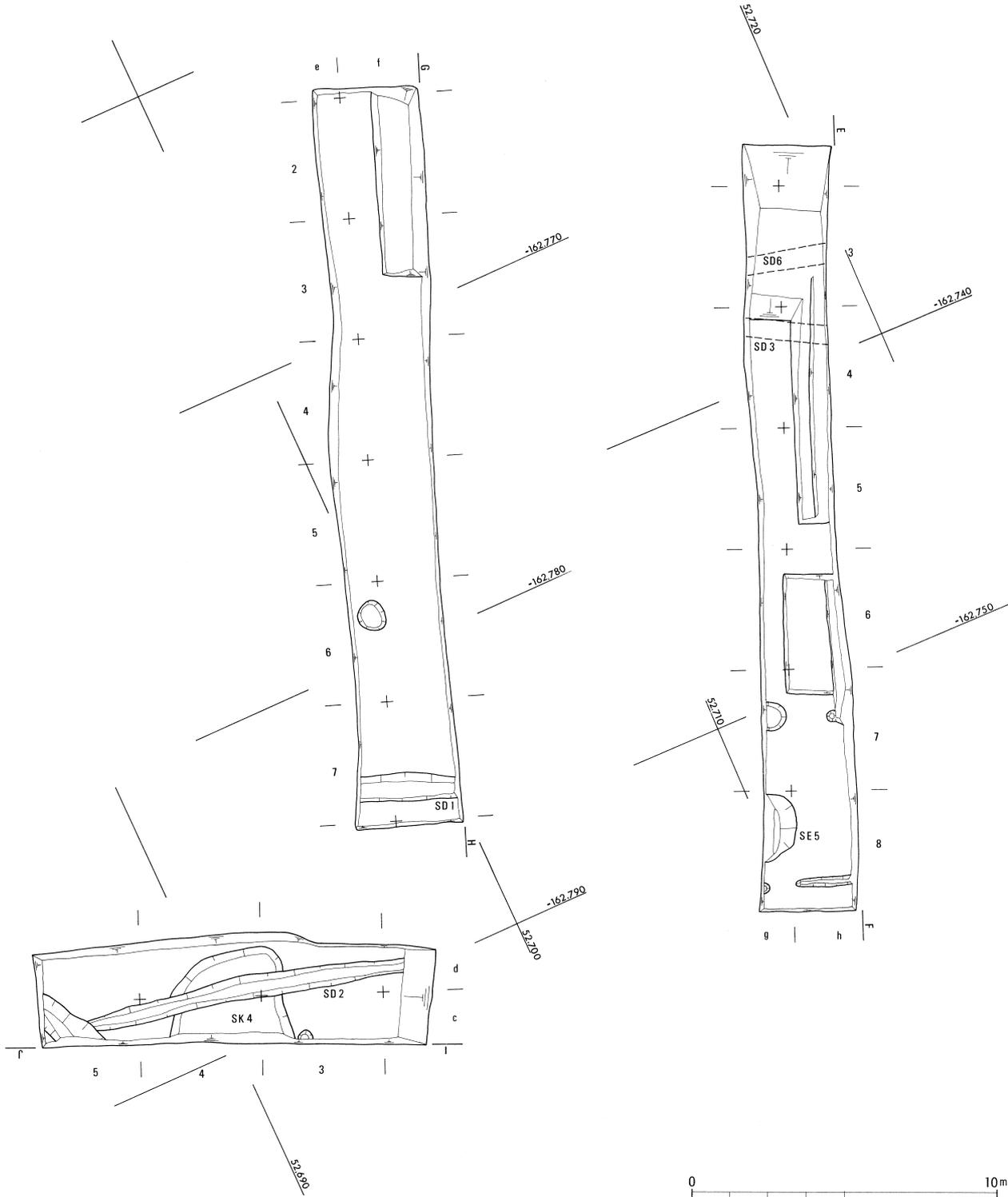
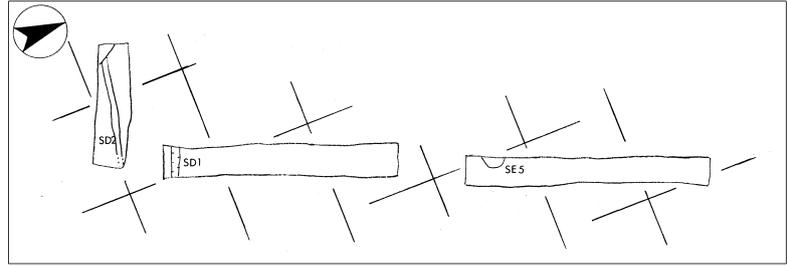


第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

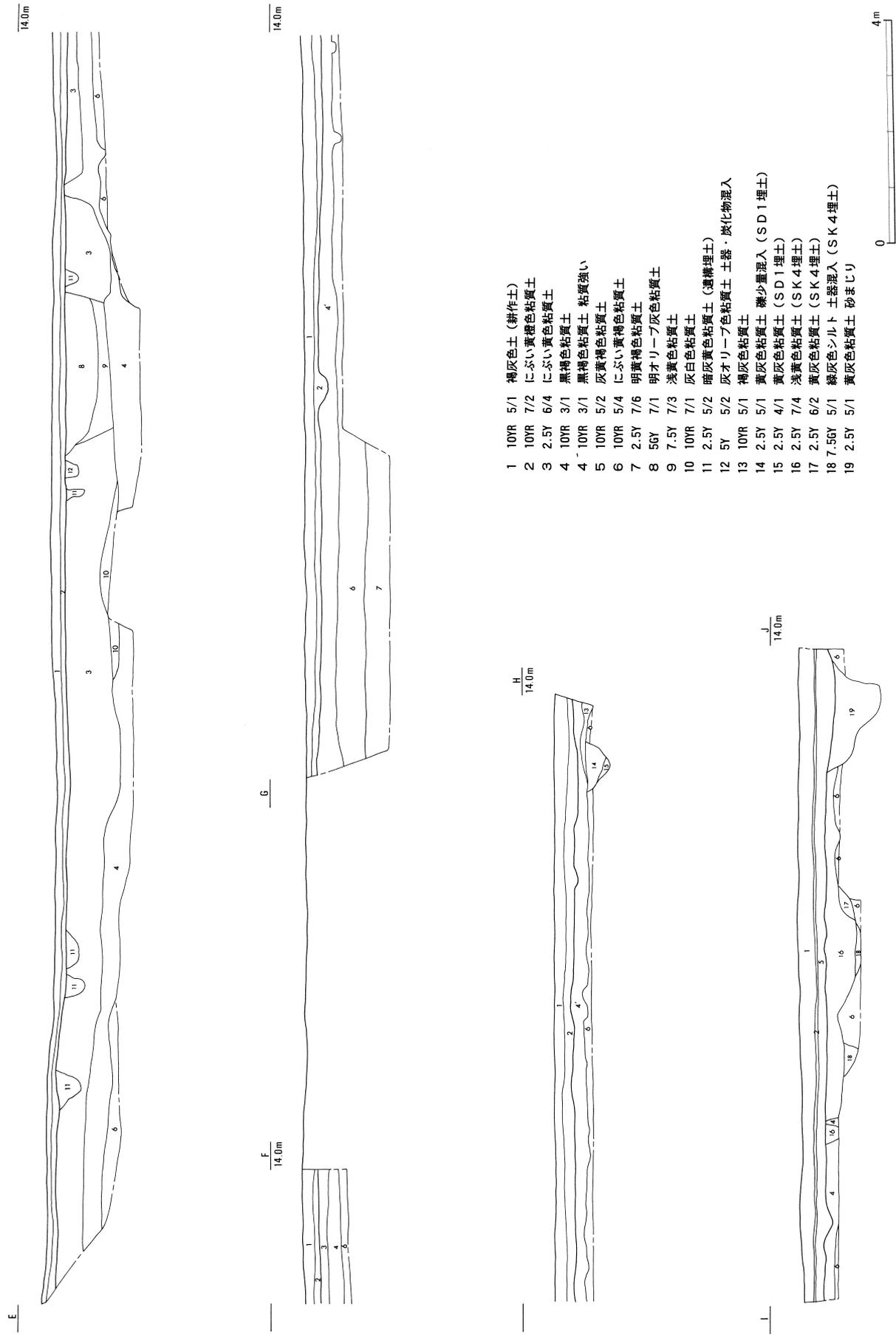
松阪市都市計画図 (1:2,500) より



第3図 調査区位置図 (1:2,000)



第4図 A地区 遺構平面図 (1:200)



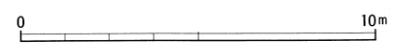
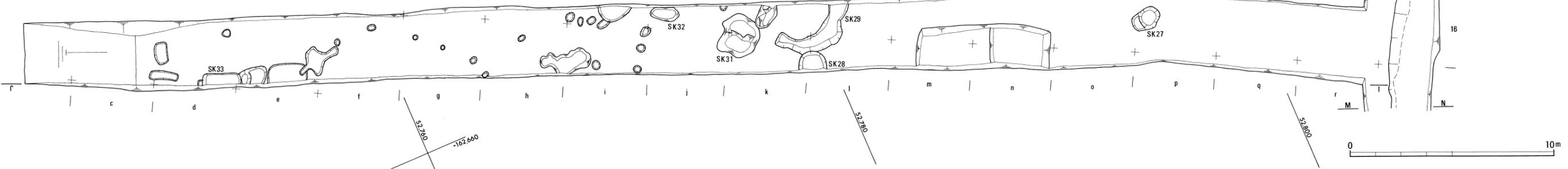
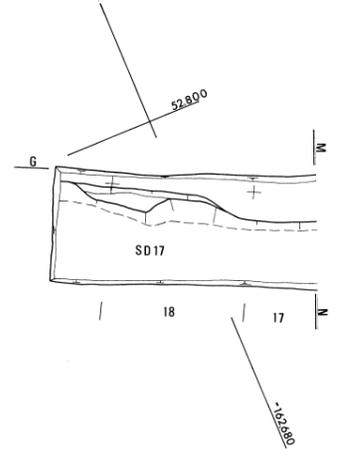
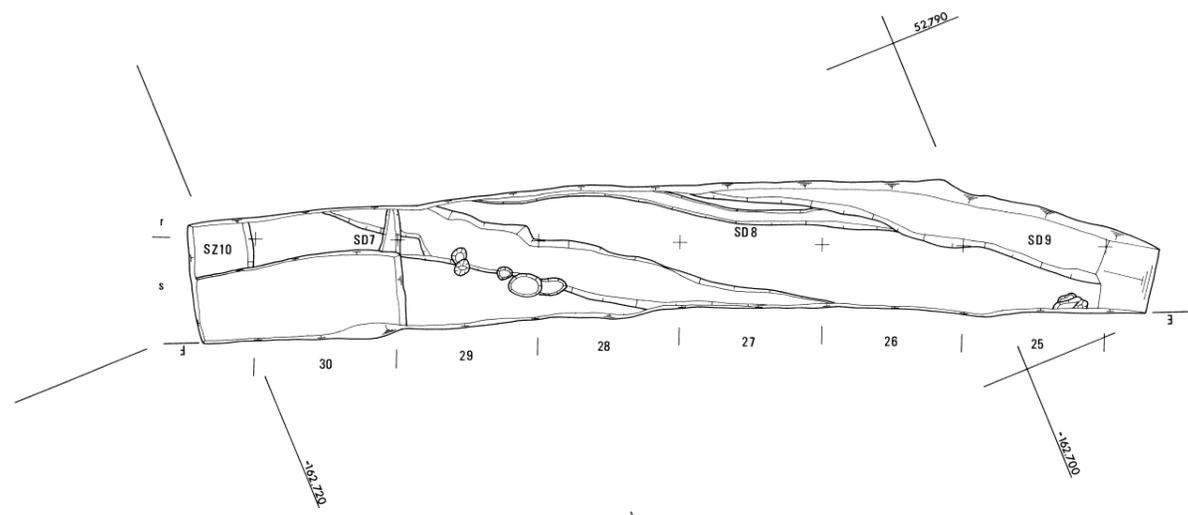
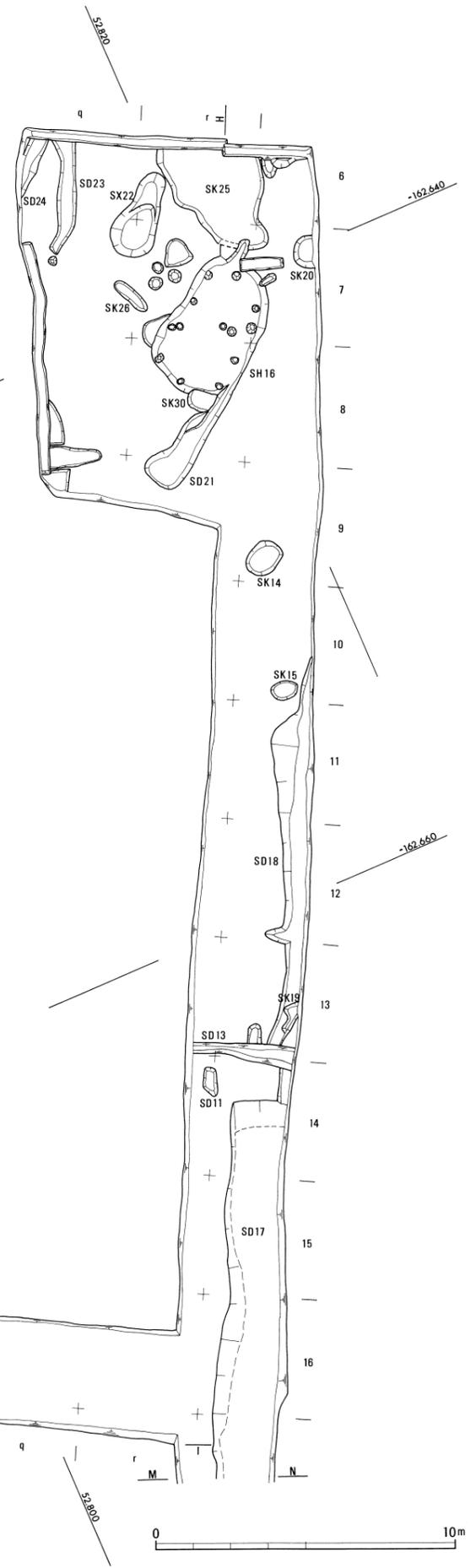
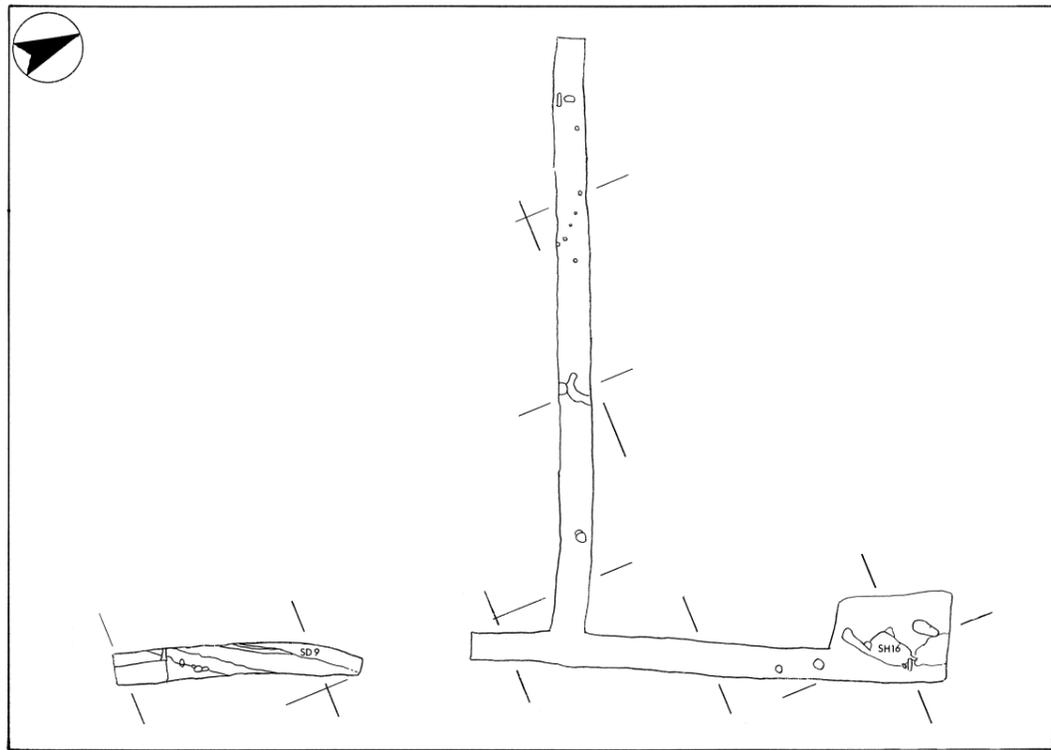
- 1 10YR 5/1 褐灰色土 (耕作土)
- 2 10YR 7/2 にぶい黄褐色粘質土
- 3 2.5Y 6/4 にぶい黄色粘質土
- 4 10YR 3/1 黒褐色粘質土
- 4 10YR 3/1 黒褐色粘質土 粘質強い
- 5 10YR 5/2 灰黄褐色粘質土
- 6 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘質土
- 7 2.5Y 7/6 明オリーブ灰色粘質土
- 8 5GY 7/1 オリーブ灰色粘質土
- 9 7.5Y 7/3 浅黄褐色粘質土
- 10 10YR 7/1 灰白色粘質土
- 11 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘質土 (澆灌埋土)
- 12 5Y 5/2 灰オリーブ色粘質土 土器・炭化物混入
- 13 10YR 5/1 褐灰色粘質土
- 14 2.5Y 5/1 黄灰色粘質土 礫少量混入 (SD1埋土)
- 15 2.5Y 4/1 黄灰色粘質土 (SD1埋土)
- 16 2.5Y 7/4 浅黄色粘質土 (SK4埋土)
- 17 2.5Y 6/2 黄灰色粘質土 (SK4埋土)
- 18 7.5GY 5/1 緑灰色シルト 土器混入 (SK4埋土)
- 19 2.5Y 5/1 黄灰色粘質土 砂まじり

第5図 A地区 土層断面図 (1:100)



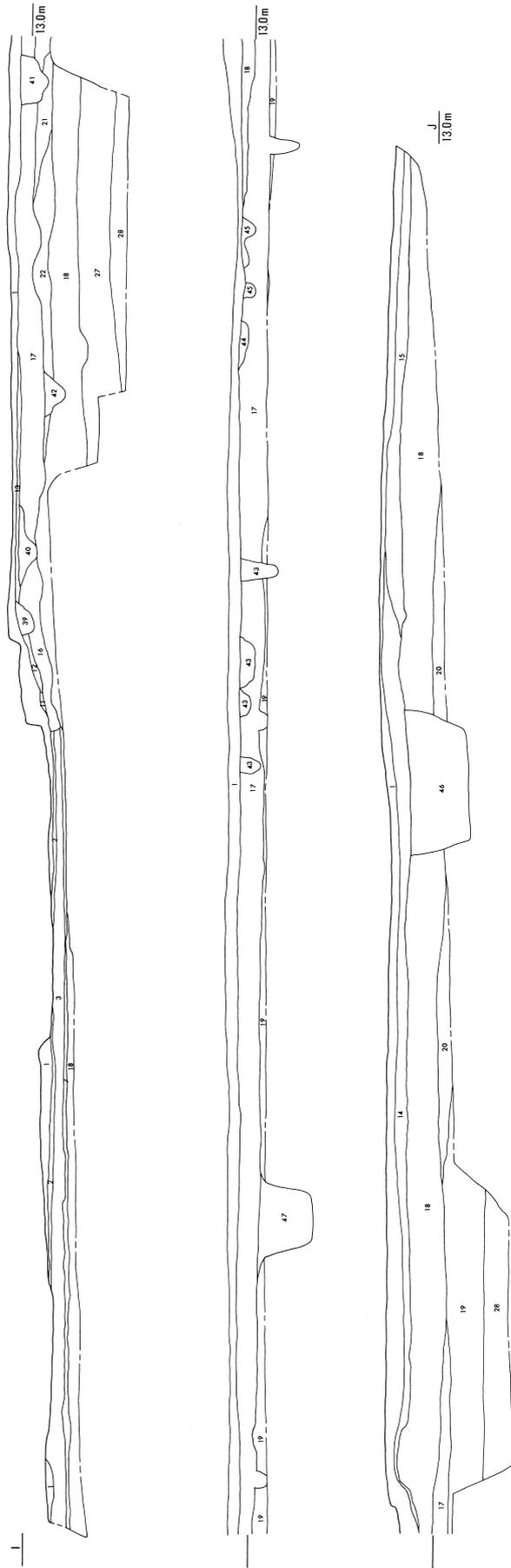
第6図 B地区 土層断面図① (1:100)

※土色は第8図参照



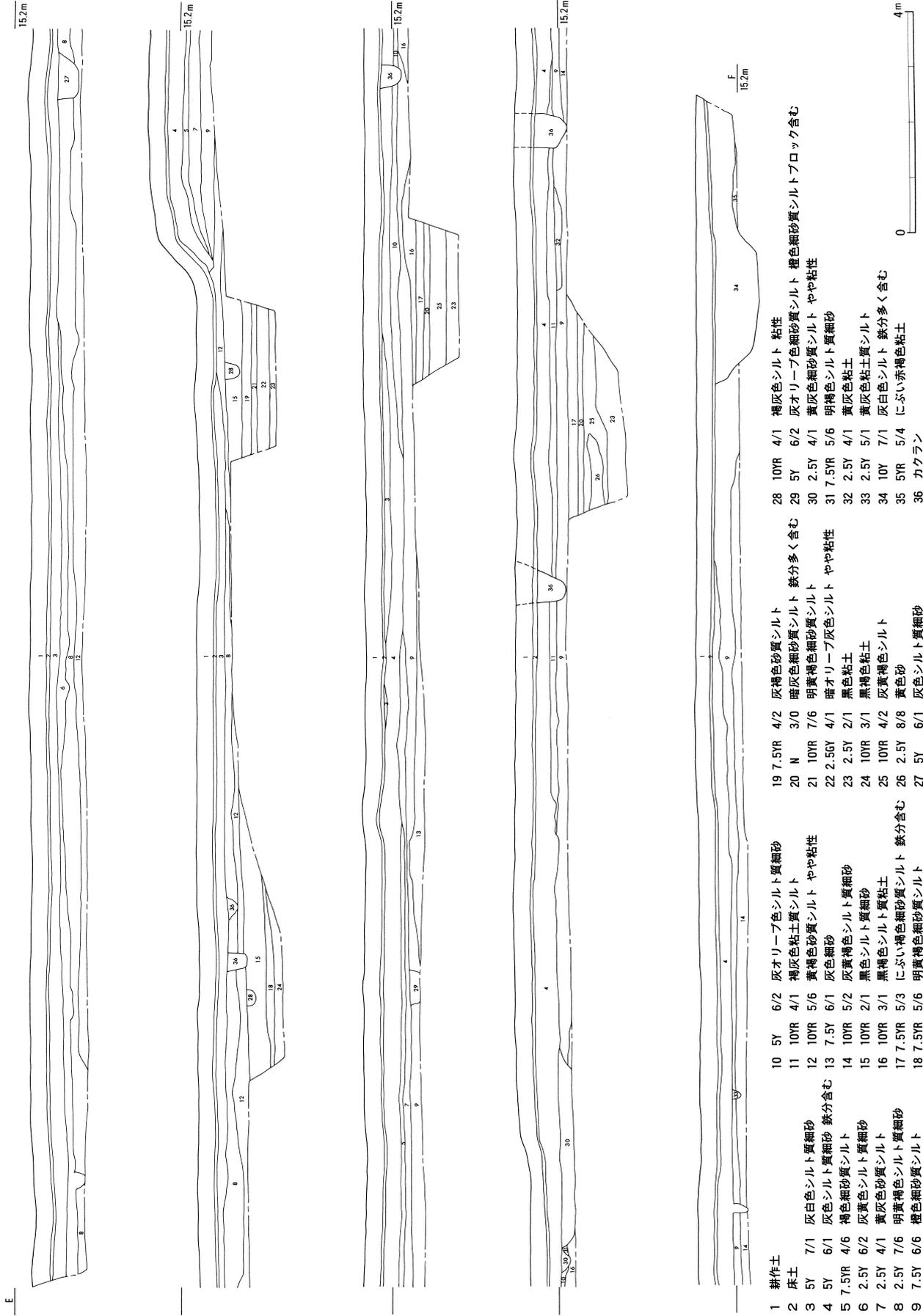
第7図 B地区 遺構平面図 (1:200)

第8図 B地区 土層断面図② (1:100)

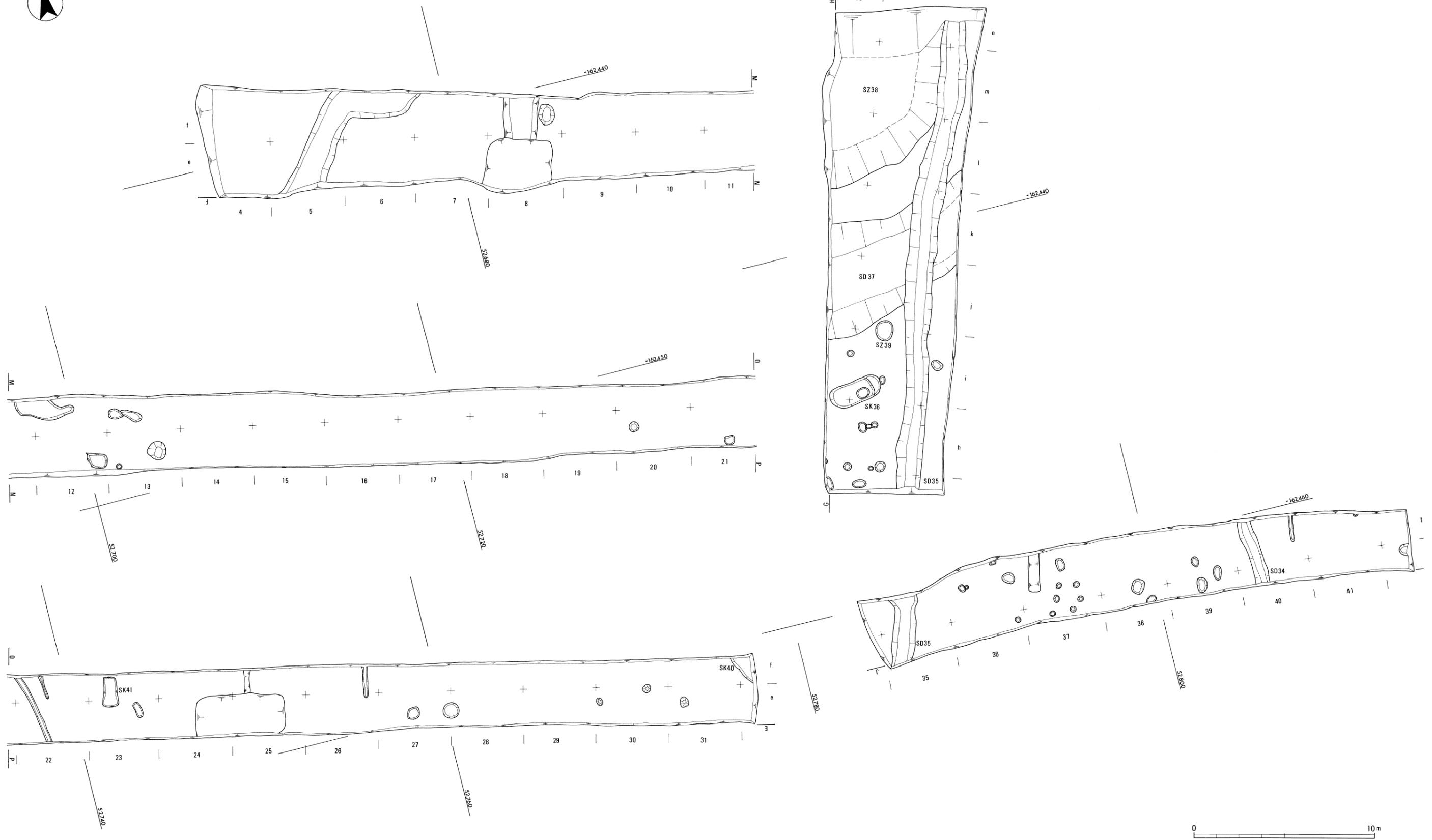


- | | | | |
|----|----------|-------|------------------------------|
| 1 | 2.5Y | 5/1 | 黄灰色砂質シルト |
| 2 | 7.5YR | 5/4 | にぶい褐色砂質シルト |
| 3 | 10Y | 5/1 | 灰色土 |
| 4 | 5Y | 6/1 | 灰色シルト質細砂 |
| 5 | 5Y | 7/1 | 灰白色シルト質細砂 |
| 6 | 2.5Y | 7/2 | 灰黄色粘土質シルト |
| 7 | 10YR | 7/2 | にぶい黄褐色粘質土 |
| 8 | 2.5Y | 7/3 | 浅黄色シルト質粘土 |
| 9 | 2.5Y | 7/6 | 明黄褐色砂質土 |
| 10 | 2.5Y | 6/2 | 灰黄色砂質シルト |
| 11 | 2.5Y | 7/4 | 浅黄色砂質シルト |
| 12 | 10YR | 4/4 | 褐色砂質シルト |
| 13 | 2.5Y | 4/3 | オリープ褐色砂質シルト |
| 14 | 5Y | 7/2 | 灰白色シルト質細砂 |
| 15 | 2.5Y | 4/1 | 黄灰色細砂質シルト |
| 16 | 7.5YR | 3/2 | 黒褐色砂質土 礫まじり |
| 17 | 10YR | 3/1 | 黒褐色砂質土 黄褐色粘土質細砂まじり |
| 18 | 10YR | 5/4 | にぶい黄褐色シルト質粘土 |
| 19 | 10YR | 4/6 | 褐色シルト質細砂 やや粘性 |
| 20 | 10YR | 1.7/1 | 黒色シルト質細砂 |
| 21 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐色細砂質シルト |
| 22 | 10YR | 3/1 | 黒褐色砂質土 礫まじり |
| 23 | 7.5Y | 7/2 | 灰白色粘土 |
| 24 | N | 6/0 | 灰色粘土 |
| 25 | 10Y | 4/1 | 灰色粘質土 |
| 26 | 2.5GY | 5/1 | オリープ灰色粘土 |
| 27 | 5Y | 5/4 | オリープ色細砂 |
| 28 | 5Y | 5/6 | オリープ色細砂 礫まじり |
| 29 | 7.5Y | 6/1 | 灰色シルト |
| 30 | N | 7/0 | 灰色細砂質シルト 鉄少量含む |
| 31 | 7.5Y | 6/2 | 灰オリープ色細砂 |
| 32 | 7.5Y | 6/1 | 灰色細砂 |
| 33 | 5Y | 5/1 | 灰色シルト質細砂 (SD17埋土) |
| 34 | 5Y | 5/2 | 灰オリープ色砂質シルト (SD17埋土) |
| 35 | 2.5Y | 4/6 | オリープ褐色砂質土 (SD21埋土) |
| 36 | 10YR | 3/4 | 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土まじり (SH16埋土) |
| 37 | 10YR | 4/3 | にぶい黄褐色砂質土 黒褐色砂質土まじり (SK25埋土) |
| 38 | 10YR | 6/8 | 明黄褐色砂質土 |
| 39 | 2.5Y | 6/3 | にぶい黄色細砂質シルト |
| 40 | 2.5Y | 5/4 | 黄褐色砂質土 |
| 41 | 2.5Y | 7/4 | 浅黄色シルト質細砂 |
| 42 | 10YR | 4/1 | 褐色砂質シルト 礫まじり |
| 43 | 10YR | 8/3 | 浅黄褐色細砂質シルト |
| 44 | 10YR | 7/4 | にぶい黄褐色粘土質シルト |
| 45 | 10YR | 5/2 | 灰黄褐色粘土質シルト |
| 46 | 2.5Y | 6/4 | にぶい黄色シルト質細砂 礫まじり (SK33埋土) |
| 47 | (SK28埋土) | | |
| 48 | カクラン | | |

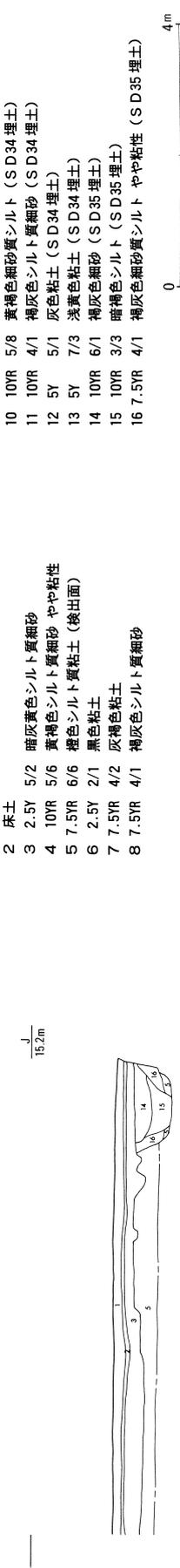
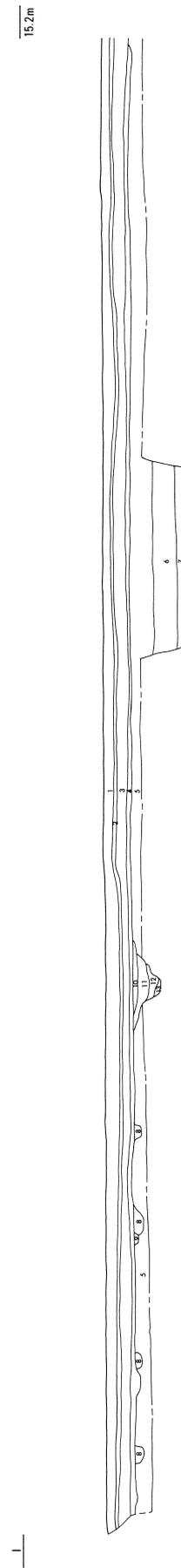
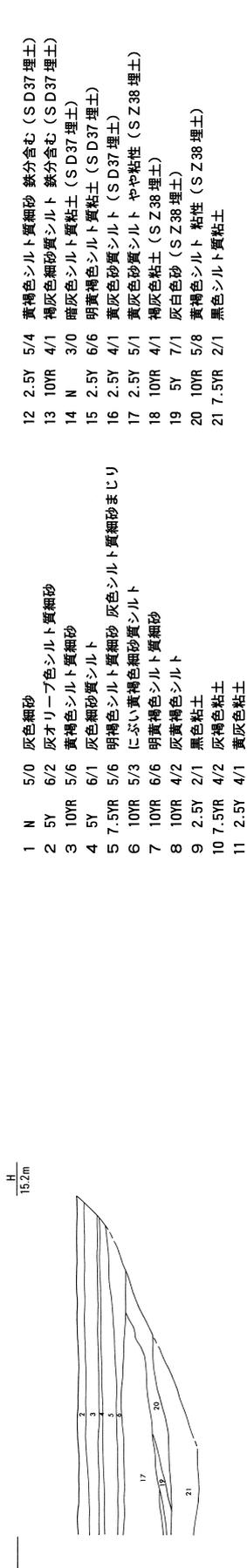
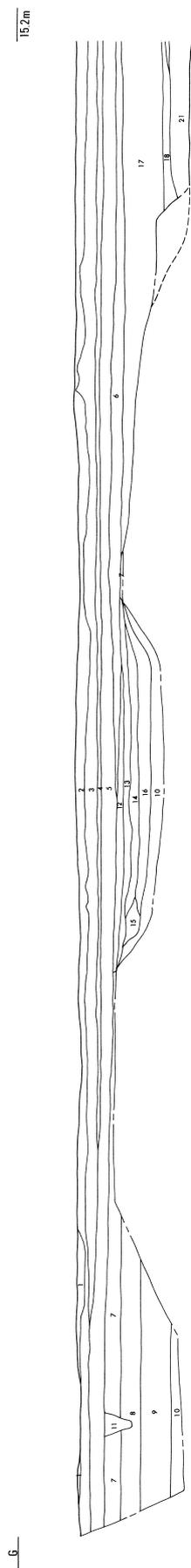




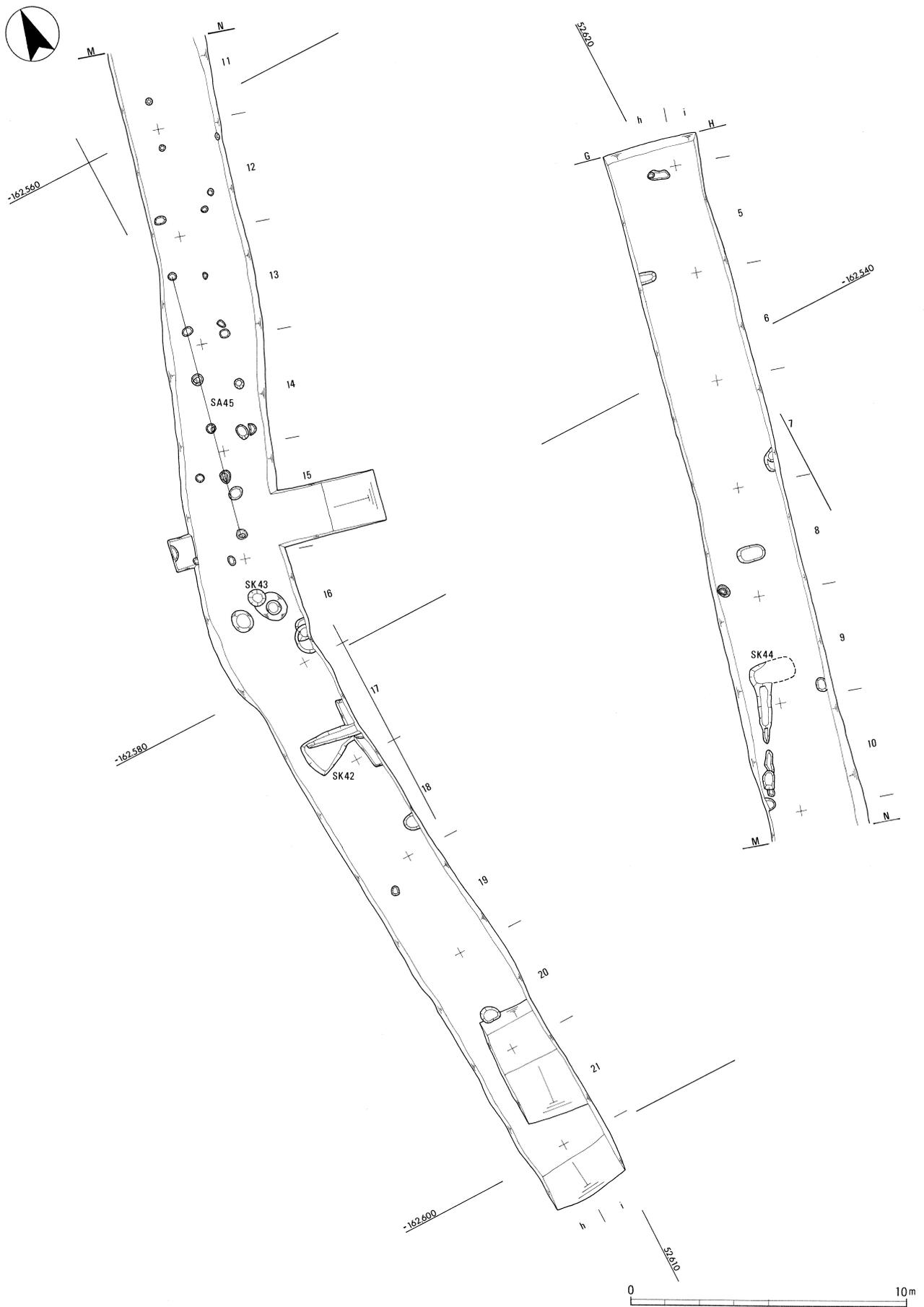
第9図 C地区 土層断面図① (1:100)



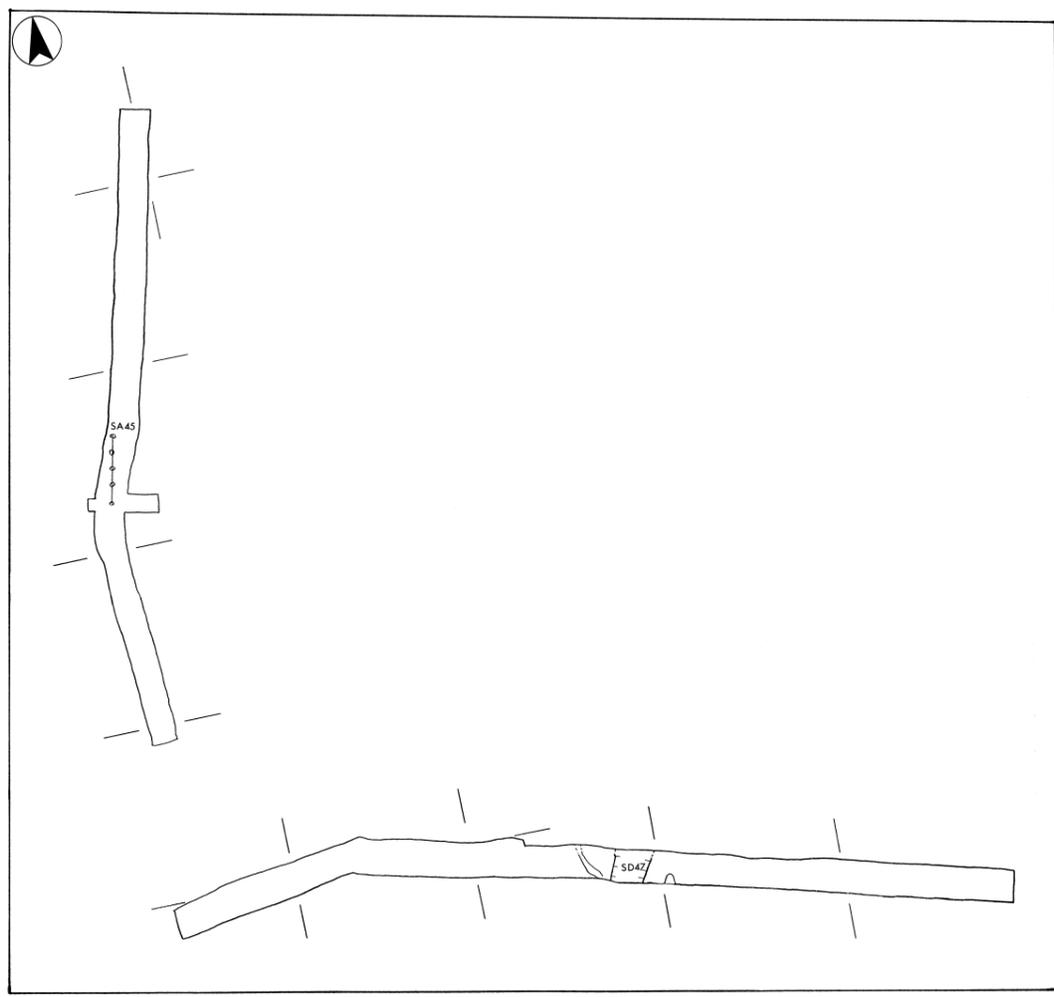
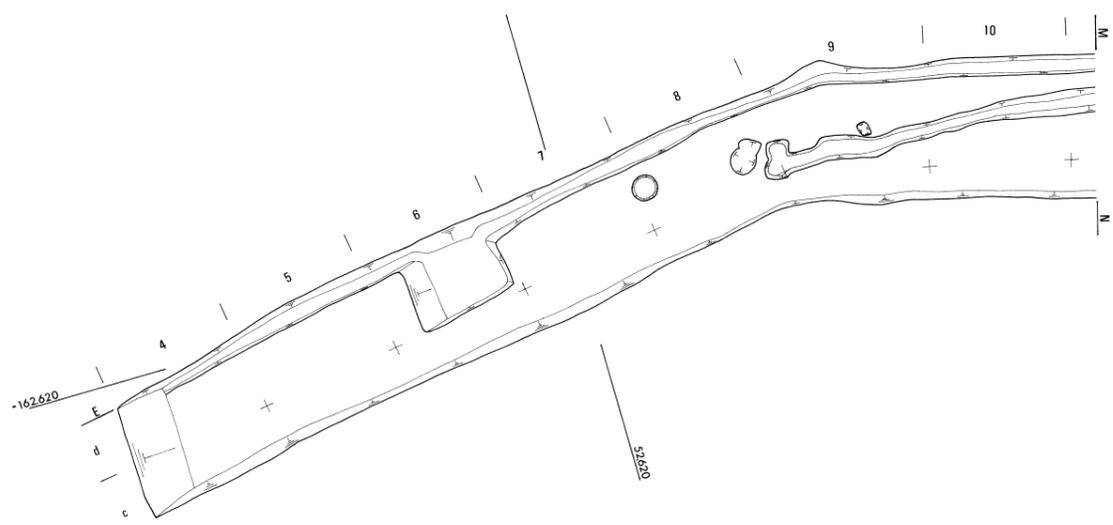
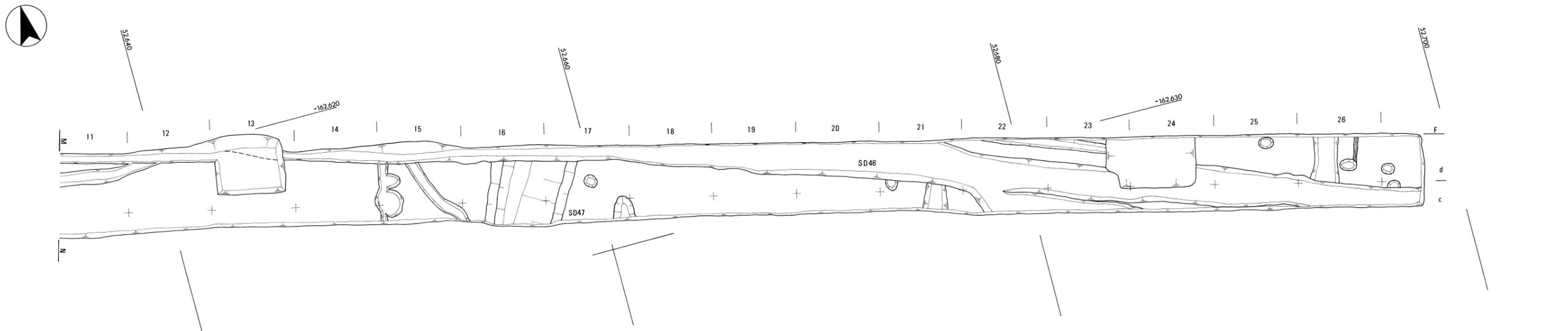
第10図 C地区 遺構平面図 (1:200)



第11図 C地区 土層断面図② (1 : 100)

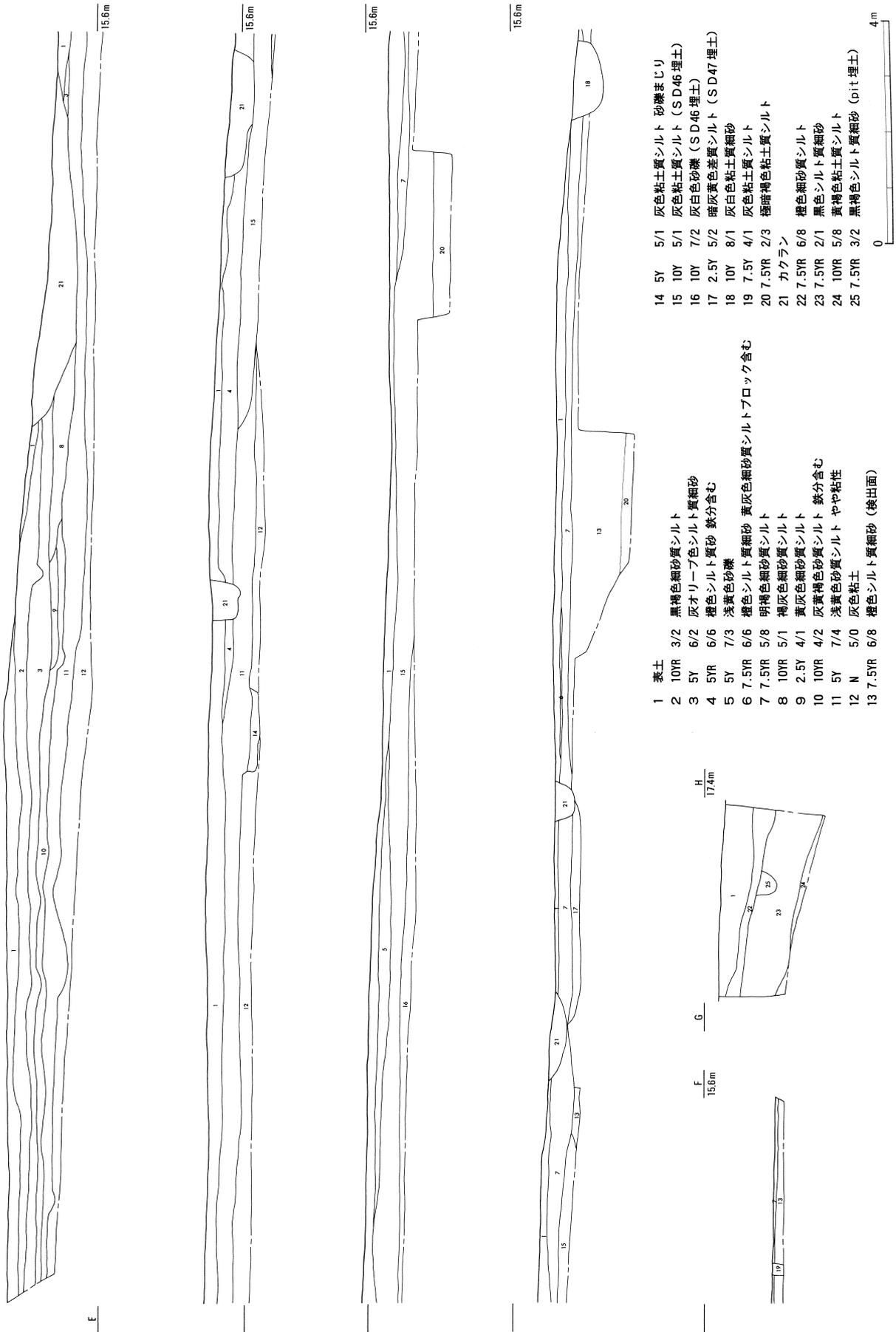


第12図 D地区 遺構平面図① (1 : 200)



第13図 D地区 遺構平面図② (1:200)

第14図 D地区 土層断面図 (1 : 100)



Ⅲ 調査の成果～層位と遺構～

1 基本層序

調査区は、櫛田川左岸の自然堤防上に位置する。以下に、各地区の基本層序について概述する。

(1) A地区

現状は水田で、標高約13.5mのところに位置する。層序は、第1層が現耕作土で褐灰色土、第2層が床土でにぶい黄橙色粘質土である。第3層はにぶい黄色粘質土であるが、調査区の南側では削平されて確認できなかった。この第3層上で、中世の遺構が検出できる。第4層は黒褐色粘質土、第5層はにぶい黄褐色粘質土である。

(2) B地区

現状は水田で、標高約13～13.4mのところに位置する。削平されて確認できない場所も存在するが、層序は第1層が黄灰色砂質シルト、第2層が灰色土、第3層が黒褐色砂質土、第4層がにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺構は第4層上で概ね検出した。

(3) C地区

現状は水田で、標高約14～16mのところに位置する。調査区が東西に長く、西方にある丘陵に向かって標高が高くなる。層序は、第1層が耕作土、第2層が床土、第3層が灰黄色系の細砂、第4層が黄褐色系のシルト、第5層が橙色系のシルト、第6層が黒色粘土である。第5層上面で遺構を検出した。

(4) D地区

現状は水田と荒地で、標高約14.6～17mのところに位置する。他地区と同様、調査区が東西、南北に長い。東西方向は西方の丘陵に向かって標高が高くなる。南北方向は丘陵裾に沿っている。遺構は、調査区東方では橙色シルト質細砂上で、また南北方向の調査区では黄褐色粘質シルト上で、それぞれ検出した。

2 遺構

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代と中世に大別できる。ここでは地区ごとに主な遺構について概述する。

(1) A地区の遺構

溝SD3・溝SD6・ピット1(h4) A地区のg2・h2～g7・h7グリッドについては、表土掘削の時点で中世の遺構検出面を捕まえることができず、SD3・SD6・h4グリッドのピット1については、断面で確認した。従って、方向・規模などは不明である。出土遺物からいずれも15世紀後半～16世紀初頭にかけてのものとする。

井戸SE5(第15図) 調査区中央部西壁際で検出した遺構である。西半分が調査区外であるため、全体の規模・深さは不明である。埋土中からは南伊勢系土師器の鍋や羽釜・鉄製の鎌などが出土している。15世紀後半～16世紀初頭にかけてのものと思われる^①。

(2) B地区の遺構

竪穴住居SH16(第17図) 調査区北端部で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸約5m、短軸約3m、検出面からの深さ約0.4mである。支柱穴がほぼ壁面に沿って確認できた。いずれも床面からの深さが0.1m程度である。焼土・炭化物などは確認できなかった。遺物は縄文時代中期の土器の小片が中心であり、この時期の遺構であると思われる。

土壇墓SX22(第17図) 調査区北端部、SH16の北西約2mのところ検出した遺構である。平面形は不整楕円形である。長軸約3m、短軸約0.85m～1.55m、検出面からの深さは最深部で約0.3mである。遺構直上、中央部に人頭大の石が置かれていた。短軸の長いほうが階段状に掘り窪められている。埋土中からは縄文時代中期の土器が出土しており、SH16と同時期のものであると考える。

石組遺構 調査区南部の西壁で幅約4mにわたって面のみ確認した。調査区のすぐ西側にU字溝が通っており、平面形は確認できなかった。昭和53年度の調査で報告されている石組遺構との関連も考えられるが、遺物もなく詳細は不明である。(P45図版7上段参照)

(3) C地区の遺構

溝SD35 調査区東部で検出した遺構である。南北

方向に走るもので、両端が調査区外へと延びている。幅約1.4m、検出面からの深さは約0.3m～0.6mで、断面は逆台形を呈する。

北部でS D37・S Z38を切っている。

出土遺物は土師器甕のほか、縄文土器や埴輪片、須恵器片などがある。古墳時代以降の溝であろう。

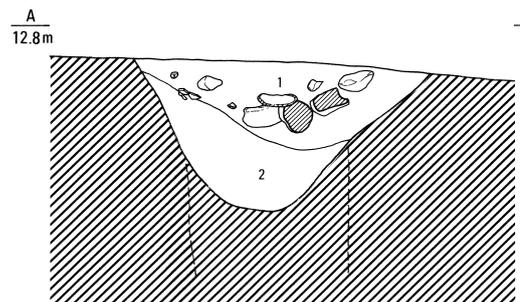
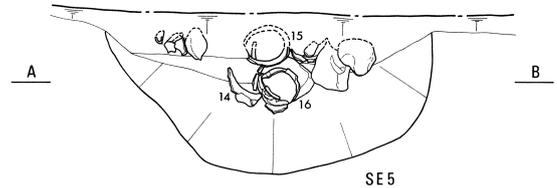
溝S D37 調査区北部で検出した遺構である。東西方向に走るもので、両端が調査区外に延びる。幅約5.6m、検出面からの深さ約0.7mで、肩から緩やかに底部へと落ちる形状である。S Z38に沿うように弧を描いた平面形であることから、後述の『車塚』^②との関連も考えられる。

埋土中からは、山茶碗のほか縄文土器や埴輪片などが出土している。

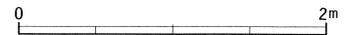
落ち込みS Z38 調査区北端で検出した遺構である。平面形から北西方向に落ち込むと思われる。S D35に切られる。出土遺物は埴輪片のほか、須恵器甕や土師器片などがある。

(4) D地区の遺構

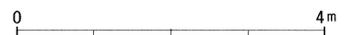
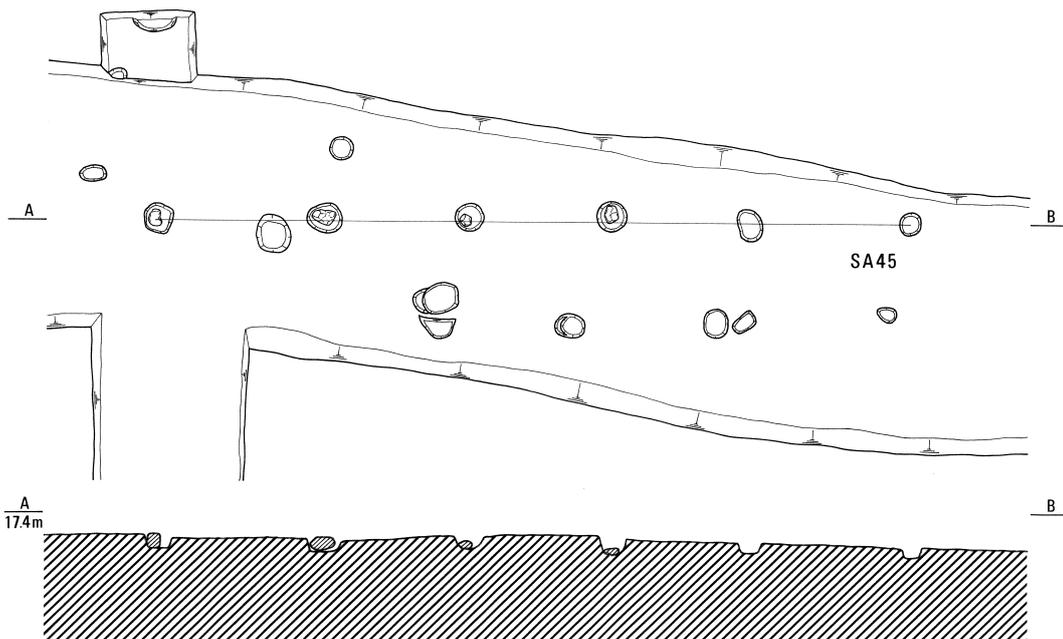
柱列S A 45 (第16図) 調査区中央部で検出した遺構である。南北5間で、主軸の方向はN13° Eである。柱間はやや不揃いではあるが約1mである。根石が確認できるピットもある。



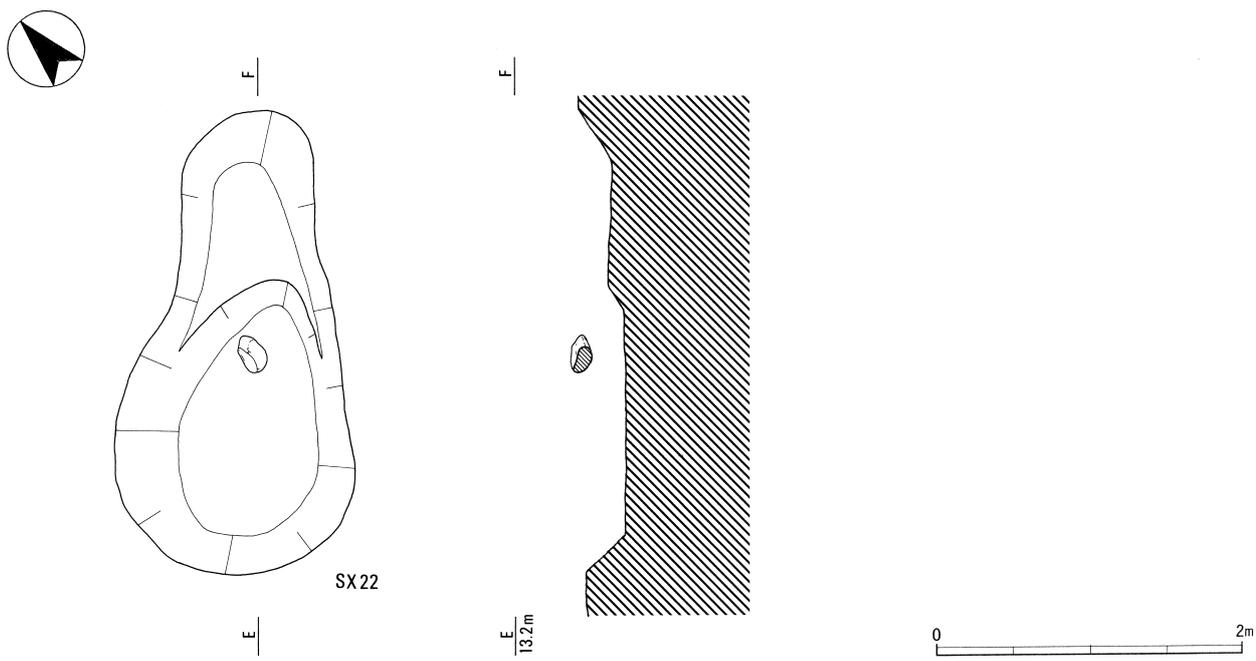
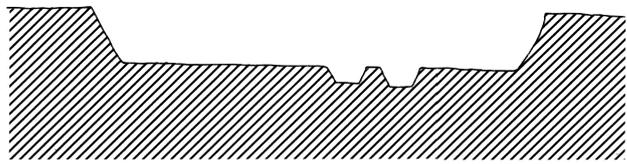
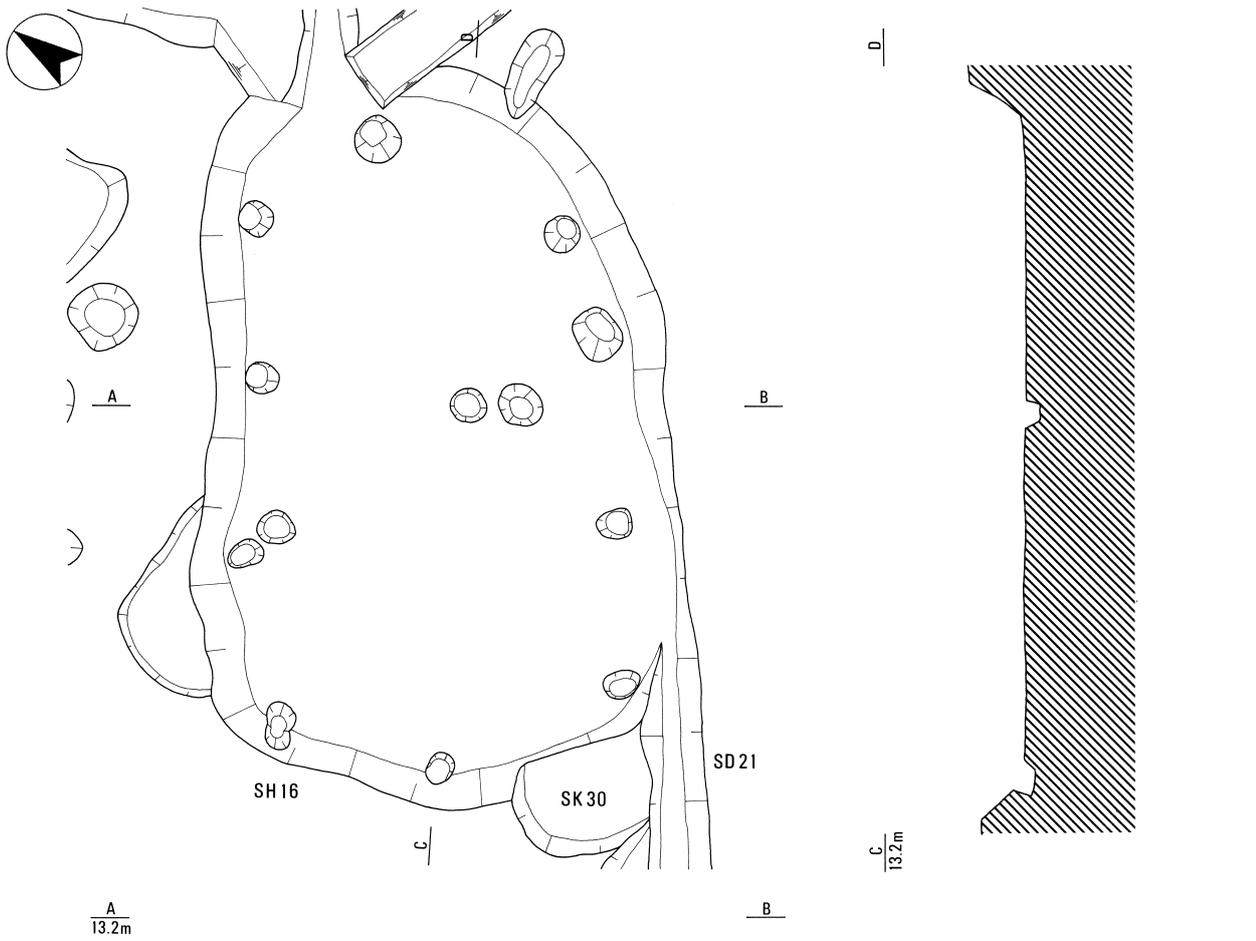
1 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 2 黒褐色粘質土 10YR2/2



第15図 SE 5 出土状況図 (1 : 50)



第16図 S A 45 (1 : 100)



第17図 SH 16、SX 22実測図 (1 : 50)

遺構番号	調査時	調査区	地区	性格	時期	規模 (m)	備考
SD 1	SD 1	A	e7・f7	溝	中世	幅1.0×深さ0.23	
SD 2	SD 2	A	c2・c3～d4・d5	溝	中世?	幅0.8×深さ (0.13～0.34)	土師器小片
SD 3	SD 3	A	g4・h4	溝?	15C後半～16C初頭		断面でのみ確認
SK 4	SK 4	A	c4	土坑	古墳時代?		S D 2 に切られる。
SE 5	SK 5	A	g8	井戸	15C後半～16C初頭	径2.1	伊勢型鍋・羽釜・鉄製品
SD 6	SD 6	A	g3・h3	溝?	15C後半～16C初頭		断面でのみ確認
SD 7	SD 7	B	r30	溝	中世?	幅0.50×深さ(0.04～0.11)	土師器片・陶器片
SD 8	SD 8	B	r26～29	溝	中世?	幅0.40×深さ(0.1～0.16)	S D 9 に切られる。
SD 9	SD 9	B	r25・s25～r27	溝	中世	幅1.5以上×深さ0.36	加工円盤
SZ10	SX10	B	r31・s31	不明	中世		土師器片・陶器片
SK11	SK11	B	r14	土坑		長軸0.84×短軸0.44×深さ0.12	緑釉陶器片
	SD12	B					抹消
SD13	SD13	B	r13・s13	溝			排水溝 (近・現代)
SK14	SK14	B	s9	土坑	奈良時代?	長軸1.36×短軸1.00×深さ0.1	須恵器片・土師器片
SK15	SK15	B	s10	土坑		長軸0.9×短軸0.64×深さ0.25	
SH16	SD16	B	r7・r8	竪穴住居	縄文時代中期	長軸4.96×短軸3.0×深さ0.36	S D 21 に切られる。支柱穴あり
SD17	SD17	B	s11～s19	溝	中世		
SD18	SD18	B	s10	溝			土師器片
SK19	SK19	B	s13	土坑			S D 17 内
SK20	SK20	B	s6・s7	土坑		深さ0.25	土師器片
SD21	SD21	B	r8	溝	飛鳥・奈良時代?	幅1.40×深さ (0.1～0.34)	S H 16 を切る。軒丸瓦
SX22	SK22	B	q6・r6	土壇墓	縄文時代中期	長軸3.0×短軸 (1.7～3.2)	S H 16 と同時期か。
SD23	SD23	B	q6・q7	溝	縄文時代	幅0.80×深さ0.1	縄文土器
SD24	SD24	B	q6	溝	縄文時代		縄文土器
SK25	SK25	B	r6	土坑	縄文時代	深さ0.2	縄文土器・磨石
SK26	SK26	B	q7・r7	土坑		長軸0.6×短軸0.4×深さ0.1	敲石
SK27	SK27	B	p16	土坑	縄文時代?	長軸1.4×短軸0.9×深さ0.3	縄文土器片
SK28	SK28	B	l17	土坑	縄文時代?	深さ0.4	S K 29 を切る。縄文土器片
SK29	SK29	B	l16・l17	土坑	縄文時代	深さ0.27	
SK30	SK30	B	r8	土坑	縄文時代		
SK31	SK31	B	k17	攪乱			
SK32	SK32	B	j16	攪乱			
SK33	SK33	B	d18・e18	土坑		深さ0.3	土師器片
SD34	SD34	C	e40・f40	溝		幅0.86×深さ0.31	土師器片
SD35	SD35	C	e35・f35ほか	溝	古墳時代以降	幅1.4×深さ (0.27～0.64)	土師器片・縄文土器・埴輪片
SK36	SK36	C	j34	土坑	奈良時代?	長軸2.9×短軸1.24×深さ0.2	土師器・須恵器甕・縄文土器
SD37	SD37	C	j34・k34ほか	溝	奈良時代後半?	幅5.6×深さ0.68	S D 35 に切られる。
SZ38	SZ38	C	k33・j33ほか	落ち込み	奈良時代		S D 35 に切られる。
SK39	SZ39	C	i34	攪乱			
SK40	SK40	C	f31・f32	土坑			出土遺物なし
SK41	SK41	C	f23	攪乱			
SK42	SK42	D	h17・i17	攪乱か?			
SK43	SK43	D	h16	土坑		直径3.2×深さ0.5	出土遺物なし
SK44	SK44	D	h9	土坑	中世	長軸1.1×短軸0.9	
SA45	SA45	D	h13・h14ほか	柱列	中世	5間・柱間約1.0	根石あり。方向N13° E
SD46	SD46	D	c26・c27ほか	攪乱			暗渠跡
SD47	SD47	D	c16・d16	溝		幅4.1×深さ0.4	土師器甕片・須恵器甕片

第1表 遺構一覧表

IV 調査の成果 ～出土遺物～

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして約50箱である。時期的には縄文時代前期から中世にまで及ぶ。土器が大部分で、若干の石製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に、B地区については種類別に、それぞれ記述する。なお遺物の図版は、必ずしも遺構単位にはレイアウトできなかつた。個々の遺物の詳細については、遺物観察表・石器観察表を参照されたい。

1 A地区出土の遺物(1～16)

溝SD1出土遺物(1・2) 1・2は山茶碗である。1は渥美産、2は瀬戸北部産のものであろう。いずれも藤澤良祐氏による山茶碗編年(以下、「藤澤編年」と呼称)^③の4型式に相当するであろう。

溝SD3出土遺物(3・7～11) 3は南伊勢系土師器の小皿である。伊藤裕偉氏による編年(以下、「伊藤編年」と呼称)のⅢb期に相当するものであろう^④。

7～10は南伊勢系土師器の鍋である。いずれも外面のほぼ全域には煤が付着している。第4段階のb～c^⑤に相当すると思われる。

11は南伊勢系の羽釜である。

井戸SE5出土遺物(12～16) 12～16は南伊勢系土師器の鍋である。12・13の外面のハケメ調整は、タテハケが最後に施されている。14は他のものに比べて大形である。内面には炭化物が付着している。16は体部下方に焼成後の穿孔が確認できる。いずれも伊藤編年^⑥による第4段階のb～cに相当する。

ピット出土遺物(4～6) 4は南伊勢系土師器の小皿、5は茶釜の蓋である。4・5は同じピット内からの出土である。

6は羽釜である。外面には煤が付着している。

2 B地区出土の遺物(17～41)

a 縄文土器(17～28)

いずれも深鉢であると思われるが、小破片が多く、

器形を復元できるものはなかつた。

17は緩やかに内湾する口縁部片である。地文に羽状縄文をもち、2条の隆帯を貼り付ける。隆帯上は爪形文を施す。

18は口縁部片である。粘土の継ぎ目のところが隆帯状になる。その上と口縁端部に、半截竹管で押し引きによる連続C字文を施し、間には刺突文を施す。

19は体部片である。羽状縄文を施す。

17～19は前期後半の北白川下層Ⅱb～Ⅱc式に並行する時期のものと思われる^⑦。

20は口縁部片である。口縁端部が肥厚する。口縁部直下に刺突文を施す。

21・22は波状口縁の破片である。21は外面に円形の沈線が施される。22は口縁端部が肥厚し、刻み文と沈線が施されるものである。

23・24は体部片である。23の外面には縄文が施される。24は口縁部を欠くが、キャリパー形の口縁部をもつものであろう。外面には羽状縄文と沈線を施す。

25・26は底部片である。25は外縁の突出部に刻みを施す。同様のものが勢和村アカリ遺跡^⑧で出土している。26は25に比べて内面の立ち上がりが緩やかである。

26は波状口縁である。口縁部直下に沈線が施される。

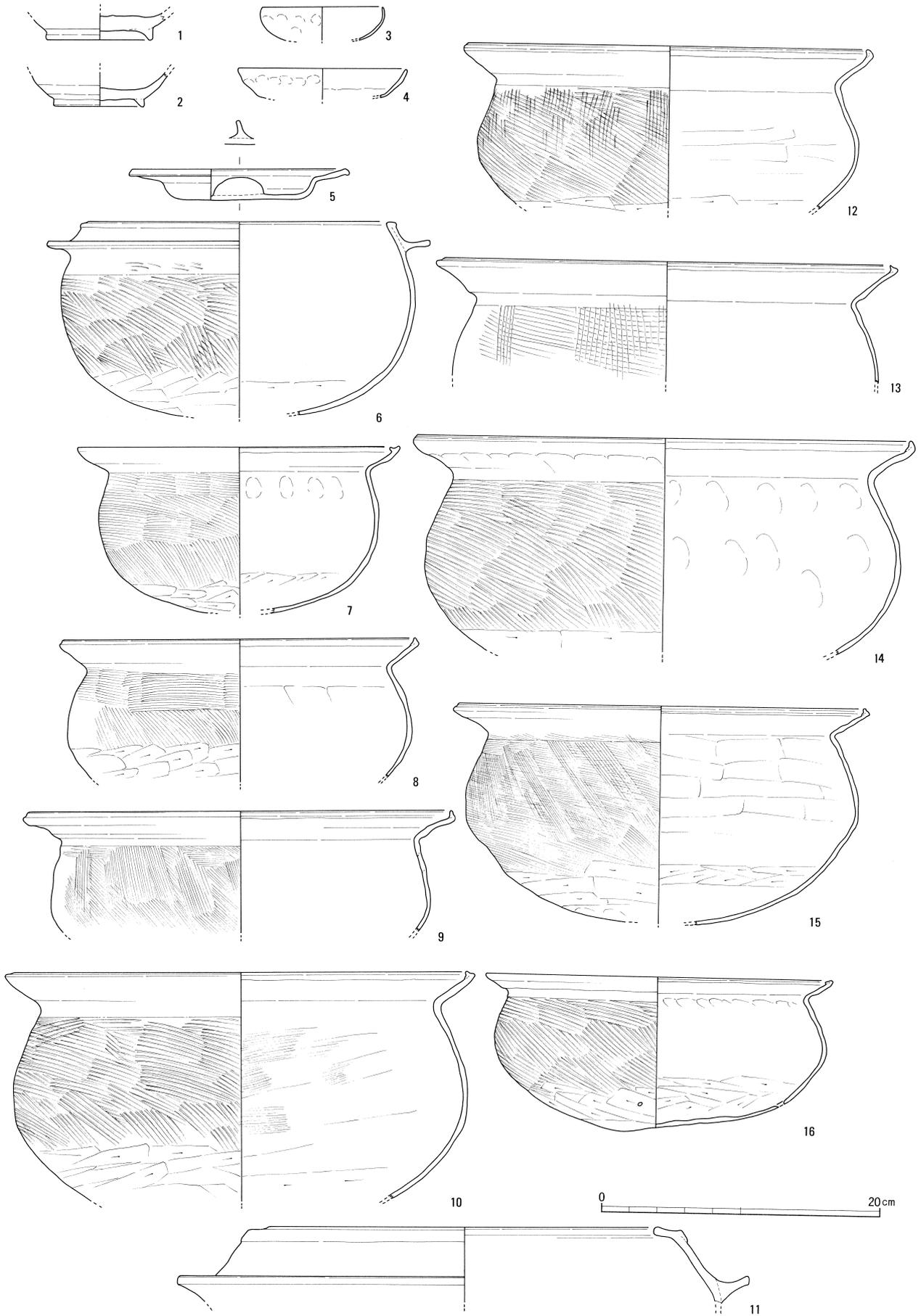
27は体部片である。口縁部を欠くが、直口口縁になるとと思われる。

b その他の土器(29～34)

29は軒丸瓦である。外縁内側に複合鋸歯文を配した複弁八葉蓮華文であると思われる。蓮子の配列は不明である。松阪市櫛田町に所在する野中垣内廃寺(大雷寺)^⑨と同系のものである。7世紀末～8世紀初頭のものと思われる。

30は加工円盤である。土師器甕の体部片を使用している。側面を敲打した後、研磨している。直径は約4cmである。

31は土師器杯、32は土師器碗である。磨滅が激しいため、調整は不明である。



第18图 A地区 出土遺物 (1:4)

33は天目茶椀、34はロクロ土師器の皿である。

c 石器・石製品 (35~42)

以下には、器種別に記述する。

石鏃 (35・36) 36は基部が凹基をなし、側縁が緩やかに外に張り出し、平面形が二等辺三角形である。サヌカイト製である。

切目石錘 (37) 37は長幅比が約1.7：1程である。チャート製であると思われる。

敲石 (38・39) 38は側縁に敲打痕が残り、表面や裏面には磨痕がみられる。チャートや石英などの小礫が多く含まれている。39は左側縁に敲打痕がよく残る。受熱している。砂岩製であると思われる。

磨石 (40~42) 41は約1/2を欠損している。その断面と片面が熱を受けて赤変している。40~42のいずれも一部敲打痕が確認できる。砂岩製である。

3 C地区出土の遺物 (43~59)

溝S D 35出土遺物 (57) 57は土師器の甕である。

口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部に面を持つ。

溝S D 37出土遺物 (54・56) 54は土師器の皿である。

56は山茶椀である。渥美産のものと思われる。藤澤編年^⑩の4型式に並行するものであろう。よく使い込まれている。

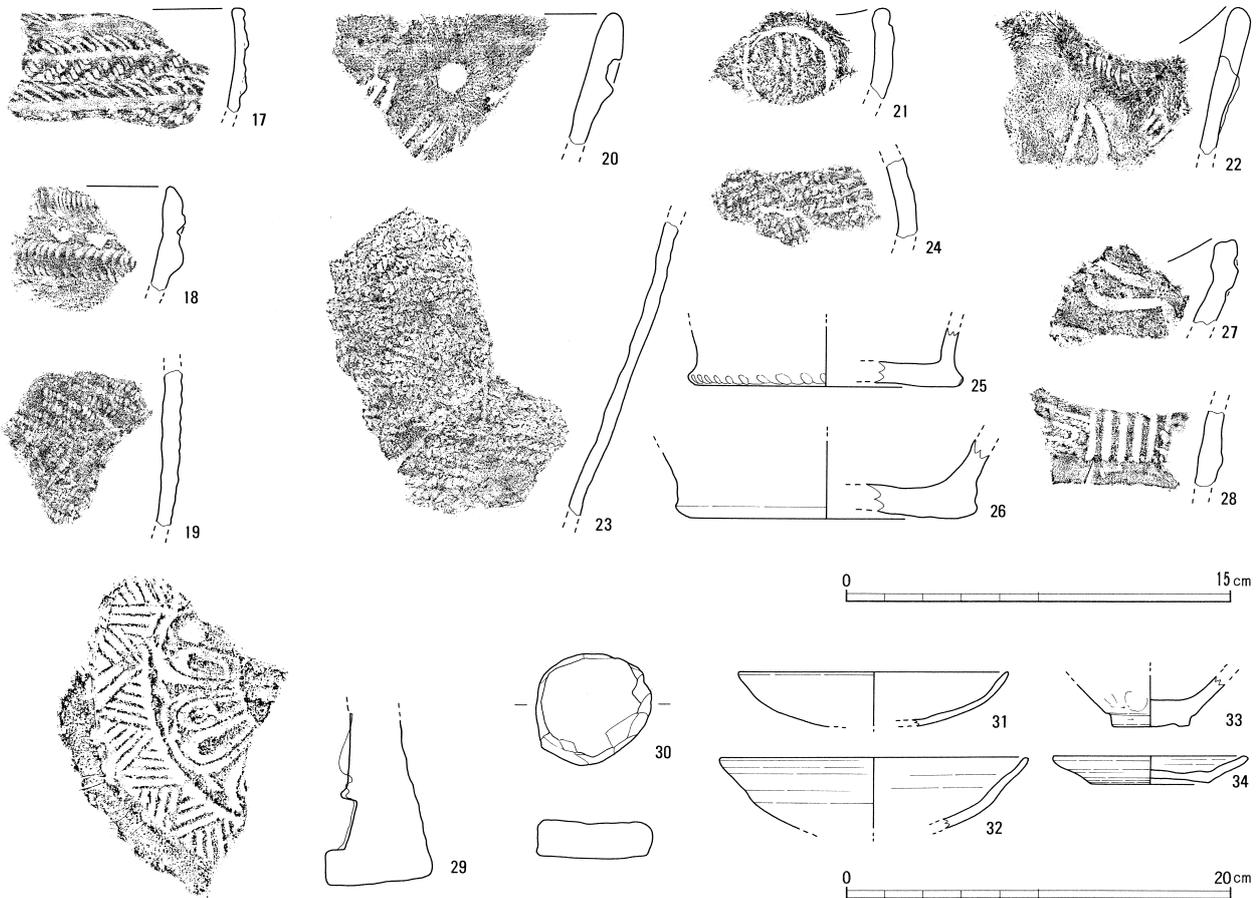
ピット出土遺物 (49) 49は埴輪片である。磨滅が激しいため調整は不明瞭であるが、凸帯の上下にかろうじてヨコハケが観察できる。

包含層など出土遺物 (43~48・50~53・55・58・59) 43は縄文土器の深鉢の口縁部である。4本の沈線を口縁に沿って施す。中期末のものと思われる。

44は加工円盤である。常滑産のねり鉢を使用している。側面を敲打によって整形している。直径は3cm程度である。

45は砥石である。

46~48・50~52は埴輪片である。46・47は外面を



第19図 B地区 出土遺物 (17~30は1：3,31~34は1：4)

タテハケ、48はヨコハケで調整している。50は台形状の凸帯を持つ。破片上部には透かしが確認できる。磨滅が激しいので、内・外面の調整は不明瞭である。51・52は底部である。

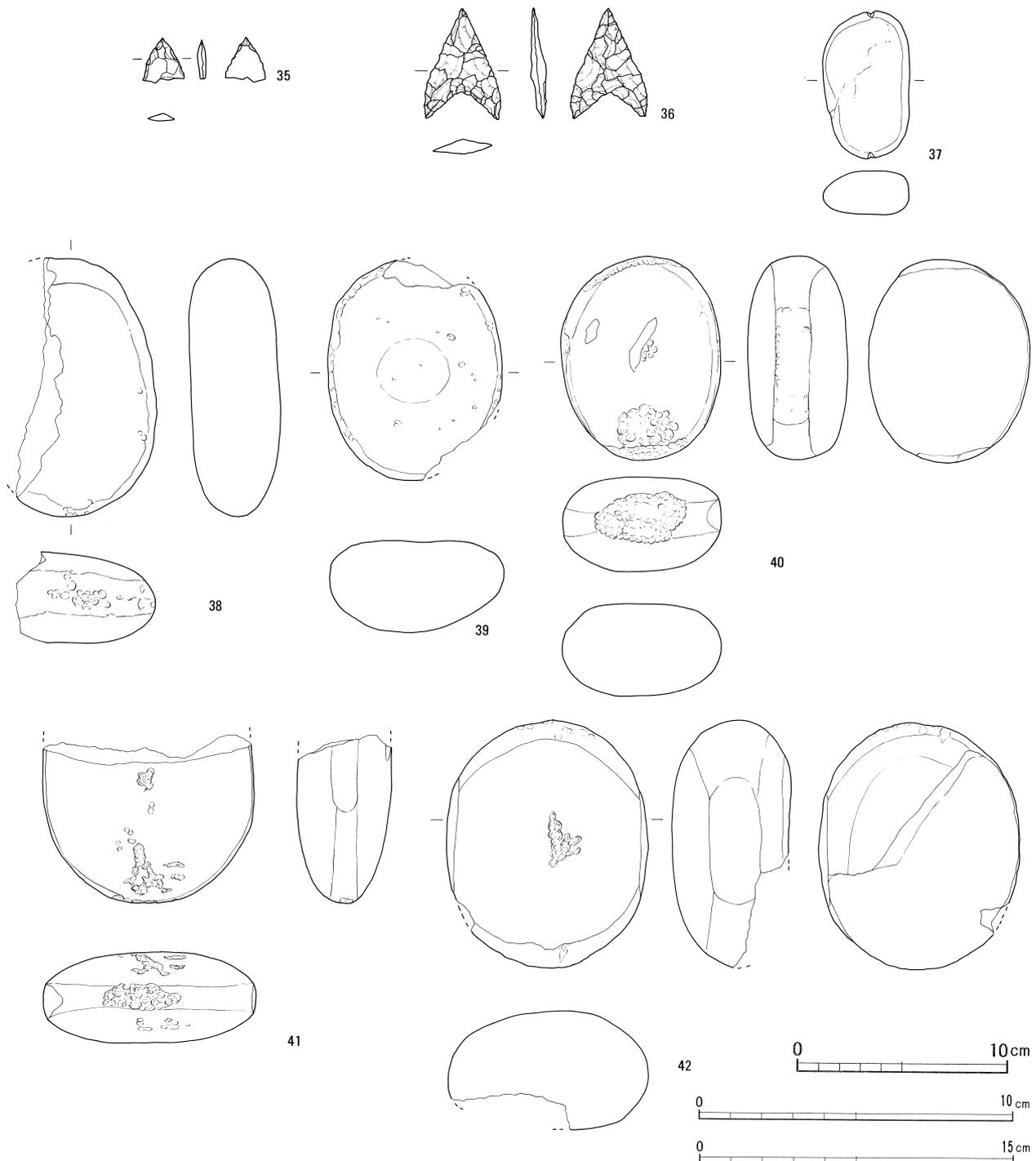
55は灰釉陶器の椀である。体部下半がやや張り出し、高台の断面形状が二等辺三角形を呈する。斎藤孝正氏による編年^①のH72号窯式に相当すると思わ

れる。

53は土師器の杯である。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がる。奈良時代後半のものと思われる。

58は土師器の甕、59は甑である。

4 D地区出土の遺物 (60~67)



第20図 B地区 出土遺物 (35,36は 2 : 3,37は 1 : 2,38~42は 1 : 3)

土坑S K42出土遺物 (67) 67は加工円盤である。平瓦片を利用しており、側面を敲打し、円形に整形している。煤が付着している。

ピット出土遺物 (61~64) 61~64は南伊勢系土師器の小皿である。伊藤編年^②のⅢ b期に相当するものと思われる。

包含層など出土遺物 (60・65・66) 60は山茶碗の高台部である。知多産のものと思われる。藤澤編年^③の5型式に相当するであろう。

65・66は加工円盤である。65は山茶碗の高台をそのまま転用しており、側面は敲打の後研磨されている。66は須恵器の壺を利用してのものと思われ

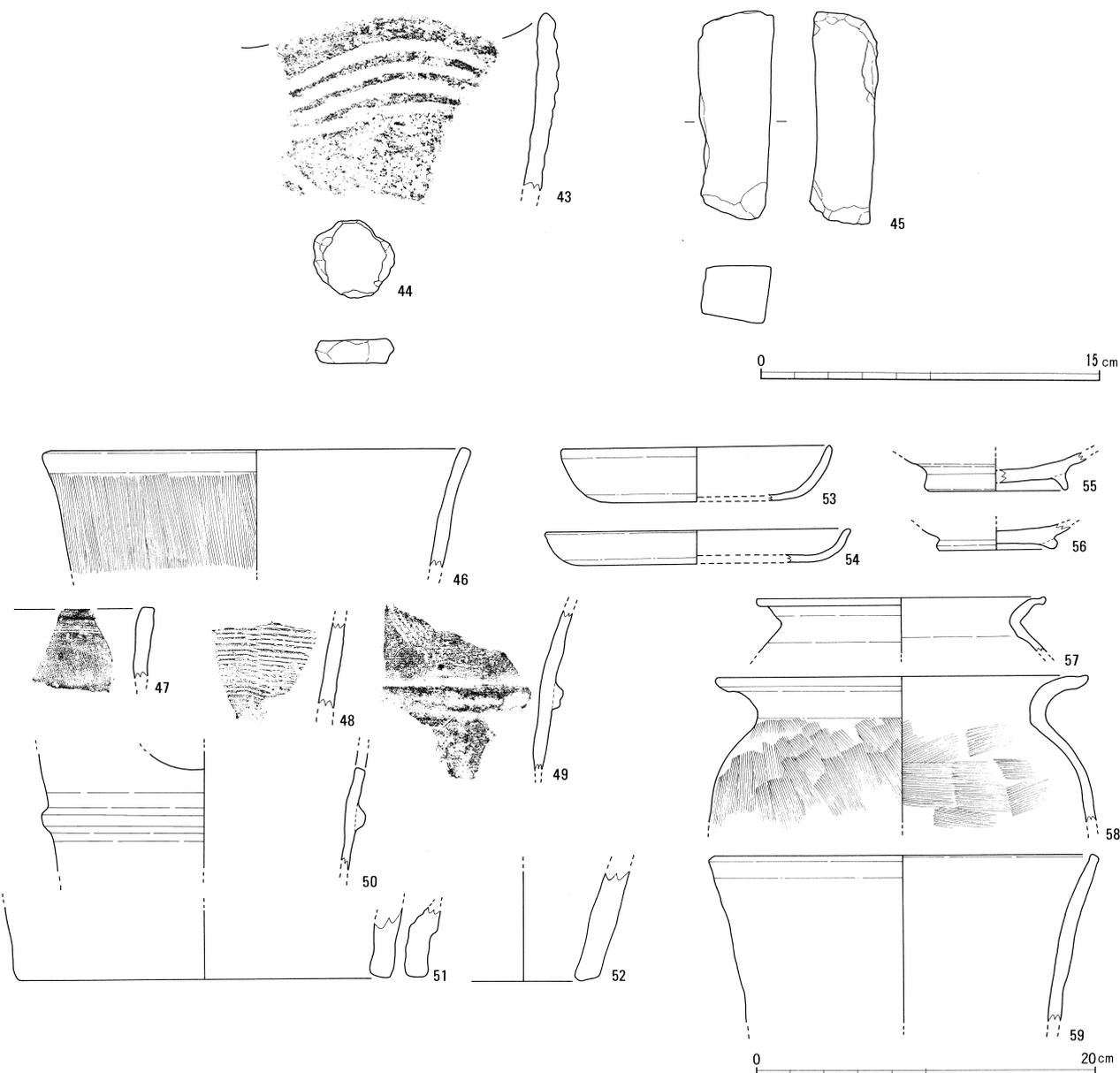
る。側面は敲打により整形されている。

5 試掘調査時出土の遺物 (68)

試掘調査のときに出土した遺物である。試掘坑の番号は20番で、B地区の隣接地点である。68は土師器の甕である。長胴形を呈する。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部に面を持つ。

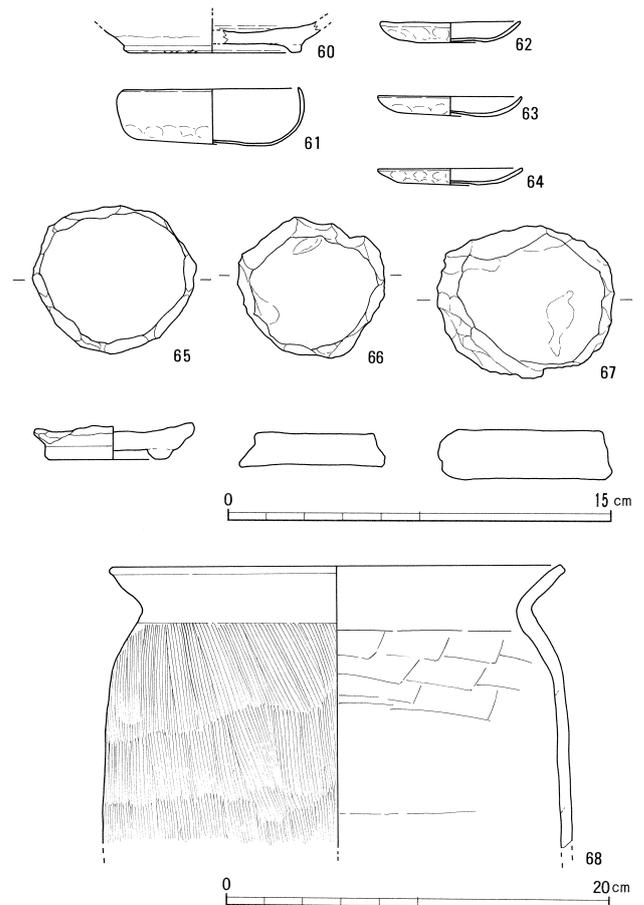
〔註・参考文献〕

- ① 伊藤裕偉 「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」
 (『鍋と甕そのデザイン』 第4回東海考古学フォーラム 1996年)



第21図 C地区 出土遺物 (43~45は 1 : 3, 46~59は 1 : 4)

- 伊藤裕偉 「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」
 (『Miehistory』 vol.1 三重歴史文化研究会 1990年)
- ② 平成11年度に行った山添遺跡試掘調査結果による。
- ③ 藤澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」 (『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- ④ 伊藤裕偉 『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』 (三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- ⑤ 註①に同じ
- ⑥ 註①に同じ
- ⑦ 網谷克彦 「北白川下層式土器様式」 (『縄文土器大観』1草創期・早期・前期 小学館 1989年)
- ⑧ 松葉和也 『縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』 (三重県埋蔵文化財センター 1999年)
- ⑨ 『松阪市史 第二巻 史料編 考古』 (松阪市 1978年)
- ⑩ 註③に同じ
- ⑪ 斎藤孝正 「東海地方の施釉陶器生産 - 猿投窯を中心にして -」 (『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西東 3 -』 古代の土器研究会 1994年)
- ⑫ 註④に同じ
- ⑬ 註③に同じ



第22図 D地区ほか 出土遺物
 (60~64, 68は 1:4, 65~67は 1:3)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	石材	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
35	021-01	石鏃	B・j17 pit1	サヌカイト	完存	1.09	0.94	0.19	0.14	
36	015-01	石鏃	B・r8 SH16	サヌカイト	完存	2.65	1.83	0.33	1.0	
37	016-01	切目石錘	B・r6 SX22	チャート	完存	4.65	2.75	1.43	30.2	
38	017-01	敲石	B・r7 SK26	石英斑岩か?	約1/3欠損	12.35	(6.65)	(4.30)	(407)	
39	071-02	敲石	B・r7 SH16	砂岩	一部欠損	(10.52)	8.27	4.40	(498)	受熱している
40	019-02	磨石	B・q8 包含層	砂岩	完存	9.69	7.62	4.50	542	
41	019-01	磨石	B・r6 SK25	砂岩	約1/2欠損	(8.0)	10.03	4.36	(494)	受熱のため赤変
42	018-01	磨石	B・q7	砂岩	一部欠損	11.83	9.56	(5.66)	(699)	
45	012-04	砥石	C 表土掘削			9.2	3.0	2.5		

第2表 出土遺物観察表 (石器)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値 (cm)			調整(技法)の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	その他						
1	010-03	陶器 山茶椀	A・f7 SD1			高台径 7.7	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り痕 内面:ロクロナデ	やや密(～1.5mm の砂粒含)	良	灰白 2.5Y 8/1	高台部 一部欠損	渥美産
2	010-04	陶器 山茶椀	A・f7 SD1			高台径 6.5	外面:ロクロナデ・貼付ナデ 内面:ロクロナデ	密(～1.5mmの砂 粒含)	良	灰白 10YR 8/1	高台部 2/3	瀬戸(北部)産
3	003-03	土師器 皿	A・h4 SD3	9.0			外面:オサエ・ナデ 内面:オサエ・ナデ	やや密	並	灰黄 2.5Y 7/2	1/3	
4	003-04	土師器 皿	A・g8 pit1	12.0			外面:オサエ・ナデ 内面:オサエ・ナデ	やや密	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	1/8	
5	003-02	土師器 茶釜蓋	A・g8 pit1	15.8	2.2		外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ハケメ・オサエ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR 7/3 灰黄褐 10YR 6/2	1/2	内面につまみ がつく
6	004-01	土師器 羽釜	A・h4 pit1	22.6		ツバ径 27.5	外面:ハケメ・ケズリ・貼付ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	やや密	並	外面:灰黄褐 10YR 6/2 5/2 内面:にぶい黄橙 10YR 7/2 7/3	3/4	ハケメ4本/cm
7	002-01	土師器 鍋	A・h4 SD3	23.0			外面:ハケメ・ケズリ・ヨコナデ 内面:ナデ・オサエ・ケズリ・ヨコナデ	粗(～2.0mmの砂 粒多)	並	浅黄橙 10YR 8/3	1/8	外面煤付着
8	001-02	土師器 鍋	A・h4 SD3	25.5			外面:ハケメ・ケズリ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	粗(～2.5mmの砂 粒多)	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	1/8	外面煤付着
9	001-01	土師器 鍋	A・gh4 SD3	31.0			外面:ハケメ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	やや密(～0.5mm の微砂粒多)	並	にぶい黄橙 10YR 6/4	1/3	外面煤付着
10	003-01	土師器 鍋	A・h4 SD3	33.6			外面:ハケメ・ケズリ・ヨコナデ 内面:ナデ・工具ナデ?・ケズリ・ヨコナデ	やや密	並	外面:にぶい黄橙 10YR 7/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	1/3	ハケメ5本/cm
11	004-02	土師器 羽釜	A・h4 SD3	32.0		ツバ径 41.0	外面:ナデ・貼付ナデ・ヨコナデ 内面:工具ナデ・ヨコナデ	やや密	並	灰白 10YR 8/2	1/6	
12	007-01	土師器 鍋	A・g8 SK5	29.6		体部径 27.4	外面:ハケメ・ケズリ・ヨコナデ 内面:ナデ・ケズリ・ヨコナデ	やや密(～1.5mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3	1/3	外面煤付着 ハケメ5本/cm
13	010-02	土師器 鍋	A・g8 SK5	33.0			外面:ハケメ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	やや密(～1.0mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/4	1/6	外面煤付着 ハケメ3～4本/cm
14	005-01	土師器 鍋	A・g8 SK5 No.2	36.0			外面:ハケメ・ケズリ・オサエ・ヨコナデ 内面:ナデ・オサエ・ヨコナデ	やや密(～2.0mm の砂粒含)	並	外面:にぶい橙 7.5YR 7/4 内面:浅黄橙 10YR 8/4	1/4	外面煤付着 内面炭化物付着
15	006-01	土師器 鍋	A・g8 SK5 No.4	30.0			外面:ハケメ・ケズリ・オサエ・ヨコナデ 内面:板ナデ・ケズリ・ヨコナデ	密	並	浅黄橙 10YR 8/3	5/6	外面煤付着 内面炭化物付着
16	007-02	土師器 鍋	A・g8 SK5 No.1	25.0		体部径 23.9	外面:ハケメ・ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ケズリ・オサエ・ヨコナデ	やや密(～2.5mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/3 6/3 灰黄褐 10YR 6/2	2/3	外面煤付着 内面炭化物付着
17	009-08	縄文土器 深鉢	B・q7 包含層				外面:ナデ・羽状縄文・隆帯上キザミ 内面:ナデ	やや密(～1.5mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 6/3 褐灰 10YR 5/1	口縁小片	前期
18	009-04	縄文土器 深鉢	B・i17 SK29				外面:連続C字文・刺突文 内面:ナデ?	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	にぶい黄褐 10YR 5/3	口縁小片	前期?
19	009-09	縄文土器 深鉢	B・q6 SK22				外面:羽状縄文 内面:ナデ	やや粗(～2.5mm の砂粒含)	並	橙 7.5YR 6/6	体部片	前期
20	009-02	縄文土器 深鉢	B・r7 SH16				外面:ナデ?・沈線文・刺突 内面:ナデ?	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	外面:灰黄褐 10YR 6/2 内面:にぶい黄橙 10YR 6/4	口縁小片	中期
21	009-06	縄文土器 深鉢	B・r8 SH16				外面:沈線文 内面:ナデ	粗(～3.5mmの砂 粒含)	並	褐灰 10YR 5/1 4/1	口縁小片	中期
22	009-07	縄文土器 深鉢	B・r7 SH16				外面:沈線文・キザミ 内面:ナデ?	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	にぶい褐 7.5YR 6/3	口縁小片	中期
23	009-10	縄文土器 深鉢	B・r8 SH16				外面:縄文 内面:オサエ	やや粗(～2.0mm の砂粒含)	並	外面:にぶい褐 7.5YR 6/3 内面:褐灰 10YR 5/1 4/1	体部片	中期
24	009-03	縄文土器 深鉢	B・r7 SH16				外面:羽状縄文?・沈線 内面:ナデ	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	灰黄褐 10YR 6/2 5/2	体部片	中期
25	008-04	縄文土器 深鉢	B・r8 SH16			底径 10.8	外面:キザミ・ナデ 内面:ナデ	粗(～5.0mmの砂 粒含)	並	にぶい黄褐 10YR 5/3	底部1/5	前～中期
26	008-05	縄文土器 深鉢	B・r6 SH16			底径 11.8	外面:調整不明 内面:ナデ	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	外面:にぶい黄橙 10YR 7/4 内面:浅黄橙 7.5YR 8/4	底部1/3	磨滅激しい 中期?
27	009-05	縄文土器 深鉢	B・i17 包含層				外面:沈線文 内面:ナデ	粗(～3.5mmの砂 粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 6/3 褐灰 10YR 6/1	口縁小片	中期
28	009-01	縄文土器 深鉢	B・j17 包含層				外面:ナデ・沈線文 内面:ミガキ	粗(～2.0mmの砂 粒含)	並	にぶい黄褐 10YR 5/3	体部片	中期前半?
29	020-01	軒丸瓦	B・r8 SD21			面径 約18.6	複線鋸歯文・複弁八葉蓮華文 ナデ・オサエ	密(～6.0mmの長 石含)	軟	暗灰黄・黒灰・褐黄	1/4弱	野中垣内廃寺 (大雷寺)と同系
30	008-07	土師器 加工円盤	B・r26 SD9			直径 約4.5	ナデ 側面:敲打後研磨	粗(～2.5mmの砂 粒含)	並	にぶい橙 5YR 7/4		重さ 33.36 g
31	008-03	土師器 杯	B 表土掘削	14.0				やや粗(～1.5mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3	残少量	磨滅激しい
32	008-02	土師器 椀	B・s6 トレンチ	16.0			ヨコナデ	やや粗(～2.5mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3	残少量	磨滅激しい

第3表 出土遺物観察表 (土器) ①

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値 (cm)			調整(技法)の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
				口径	器高	その他						
33	008-06	陶器 天目茶碗	B・s26 包含層			高台径 4.0	外面:ロクロケズリ・削り出し高台・施釉 内面:施釉	密(微砂粒含)	良	素地:灰白 2.5Y 8/2 釉:黒 N 2/0	底部完存	
34	008-01	ロクロ土師器 皿	B・r16 包含層	10.2	1.4	底径 6.1	外面:ロクロナデ・糸切り痕 内面:ロクロナデ	やや粗(～2.0mm の砂粒含)	不良	にぶい黄橙 10YR 7/2	1/2弱	
43	013-02	縄文土器 深鉢	C・h34 包含層				外面:ナデ・沈線文 内面:ナデ	粗(～3.0mmの砂 粒含)	並	にぶい橙 5YR 6/4 にぶい橙 7.5YR 6/4	口縁小片	中期?
44	012-05	陶器 加工円盤	C・f17 包含層			直径 約3.5	側面:やや研磨	やや粗(～1.0mm の微砂粒含)	並	にぶい褐 7.5YR 5/3 橙 5YR 7/6		重さ15.995g 常滑・練鉢
46	013-01	埴輪	C 排土	24.2			外面:タテハケ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	やや粗(～1.5mm の砂粒含)	並	にぶい橙 7.5YR 7/4 浅黄橙 10YR 8/4	1/6	
47	013-05	埴輪	C・mn34 包含層				外面:タテハケ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	やや密(～1.2mm の微砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/4 にぶい橙 7.5YR 7/3	口縁小片	
48	013-04	埴輪	C 排土				外面:ヨコハケ 内面:ナデ	やや密(～1.2mm の砂粒含)	並	にぶい橙 7.5YR 7/3 7/4	小片	
49	013-03	埴輪	C・h34 pit3				外面:ナデ・ヨコハケ?・タガ貼り付け 内面:ナデ	やや粗(～1.5mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3 浅黄橙 7.5YR 8/4	小片	タガ断面M字状
50	012-02	埴輪	C・l33 包含層				外面:ナデ・タガ貼り付け・透かし 内面:ナデ	やや粗(～3.5mm の小石含)	並	浅黄橙 10YR 8/3		磨減激しい
51	012-01	埴輪	C・n35 トレンチ				外面:ナデ 内面:ナデ	粗(～2.2mmの砂 粒含)	並	橙 7.5YR 7/6 にぶい黄橙 10YR 7/4	底部小片	
52	012-03	埴輪	C・mn34 包含層				外面:ナデ 内面:ナデ	やや粗(～2.8mm の砂粒含)	並	灰白 7.5YR 8/2 橙 5YR 7/6	底部小片	
53	011-06	土師器 杯	C 排土	16.0	3.2		外面:ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	粗(～1.5mmの微 砂粒含)	並	外面:にぶい橙 7.5YR 7/3 内面:赤黒 10R 2/1	1/12	
54	012-06	土師器 皿	C・j33 SD37	18.0	2.0		外面:ナデ・ヨコナデ 内面:ナデ・ヨコナデ	やや密	並	橙 5YR 6/6 灰褐 5YR 5/2	1/12	
55	011-03	陶器 灰釉陶器	C 表土掘削			高台径 8.0	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y 7/1	高台部 1/3	猿投産 H72号窯
56	011-04	陶器 山茶碗	C・k35 SD37			高台径 6.8	外面:ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り痕 内面:ロクロナデ	やや密	並	灰白 5Y 7/1	高台部 3/5	渥美産
57	011-05	土師器 甕	C・m35 SD35	17.0			外面:ハケ?・ヨコナデ 内面:ハケ?・ヨコナデ	やや密(～2.2mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/3 灰黄褐 10YR 7/2	1/5	
58	011-01	土師器 甕	C 排土	21.8			外面:ハケメ・ヨコナデ 内面:ハケメ・ヨコナデ	やや粗(～3.2mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/3 断面:黒 5Y 2/1	1/4	
59	011-02	土師器 甕	C・m34 包含層	22.2			調整不明	粗(～1.3mmの微 砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/4 断面:黄灰 2.5Y 4/1	1/8	磨減激しい
60	014-04	陶器 山茶碗	D 排土			高台径 9.2	外面:ロクロナデ・糸切り痕 内面:ロクロナデ	やや密(～1.0mm の砂粒含)	良	灰白 5Y 7/1	高台部 1/4	知多産 モミガラ痕有り
61	014-08	土師器 皿	D・h11 pit1	9.2	3.0		外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや粗(～1.0mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 6/4	1/2	
62	014-07	土師器 皿	D・h11 pit1	7.3~7.9	1.1		外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや粗(～2.0mm の砂粒含)	並	灰白 10YR 8/3	一部欠損	
63	014-05	土師器 皿	D・h11 pit1	7.5	1.1		外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや密(～1.0mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3	ほぼ完存	
64	014-06	土師器 皿	D・h11 pit1	7.6	0.9		外面:ナデ・オサエ 内面:ナデ	やや密(～1.0mm の砂粒含)	並	浅黄橙 10YR 8/3	2/3	
65	014-01	陶器 加工円盤	D 表土掘削			直径 約6.0	ロクロナデ・貼付ナデ・糸切り痕 側面:研磨有り	やや密(～1.0mm の砂粒含)	良	灰白 2.5Y 8/1		山茶碗 重さ 44.8g
66	014-03	須恵器 加工円盤	D 表土掘削			直径 約5.0 ～6.0	ナデ・タタキ? 側面:敲打	やや密(～1.0mm の砂粒含)	良	灰 N 6/0		重さ 45.8g
67	014-02	瓦 加工円盤	D・h17 SK42			直径 約6.0	ケズリ 側面:敲打	やや密(～1.0mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 6/4		煤付着 重さ 92.7g
68	010-01	土師器 甕	試掘	24.0			外面:ハケメ・ヨコナデ 内面:板ナデ・ヨコナデ	やや粗(～1.0mm の砂粒含)	並	にぶい黄橙 10YR 7/4 断面:暗灰 N 3/0	3/8	ハケメ7～8本/cm

第4表 出土遺物観察表 (土器) ②

〔遺物観察表凡例〕

遺物観察表については、以下のような方法で表記した。

番号：図版に対応する番号である。

登録番号：実測図作成番号である。

器種：土師器・陶器などの別と、器種(甕・壺・皿など)を記した。

出土位置 遺構：その遺物が出土した小地区、遺構名などを記した。

計測値：計測できる範囲で表記した。

調整(技法)の特徴：おおよそを表記した。

胎土：密・やや密・やや粗・粗の4段階で表記した。

焼成：良・並・不良の3段階で表記した。

色調：『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編 9版 1989)を基準にしている。

残存度：特に示していないものについては、口縁部の残存状況を示す。数値で表せないものは「小片」とした。石器は言葉で記した。

IV 自然化学分析

1 SX22のリン・カルシウム分析

山添遺跡（三重県松阪市山添町所在）は櫛田川左岸に位置し、これまでの発掘調査により、縄文時代中～後期の竪穴住居跡や土坑などが検出されている。

今回検出された縄文時代中～後期の土坑の中で、SX22は竪穴住居跡の近くから検出されており、その形態的な特徴から墓として利用された可能性がある」と指摘されている。ただし、骨片や副葬品など遺体が埋納されていたことを示唆する遺物が全く伴出されず、その用途については不明である。そこで、今回、SX22の用途について検討するため、リン・カルシウム分析を実施する。

(1) 試料

試料は、SX22の埋土から6点（試料番号2～6）、対照試料としてSX22直近の検出面から2点（試料番号1・8）、さらにその他の地点において遺構検出面・検出面の上位層から5点（試料番号9～13）、耕作土から2点（試料番号14・15）、合計15点が採取された。

試料は、にぶい黄褐色～黒褐色を呈する埴壤土（CL）ないし軽埴土（LiC）からなる。試料の詳細は、結果とともに表示する。また、図1にSX22遺構覆土の試料採取位置を示す。

なお、土色は新版標準土色帖に（農林省農林水産技術会議事務局監修、1967）、土質は土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）に基づく。

(2) 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壤養分測定法委員会、1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmφのふるいを全通させる（微粉碎試料）。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに

秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取して、干渉抑制剤を加えた後に、原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。

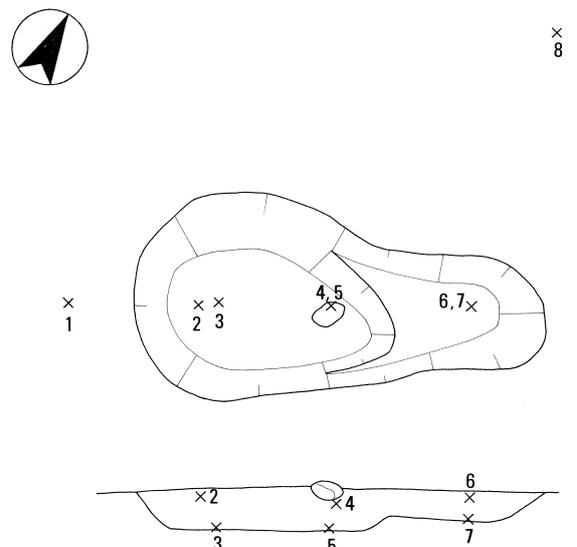
この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（ P_2O_5 mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

(3) 結果

結果を第5表に示す。SX22埋土（試料番号2～7）では、リン酸含量が2.02～3.95 P_2O_5 mg/g、カルシウム含量が2.79～4.07CaOmg/gであり、両成分ともバラツキがある。

また、SX22直近の検出面から採取された試料番号1・8は、リン酸含量が約5 P_2O_5 mg/g、カルシウム含量が約3～4CaOmg/gである。

その他の地点から採取された対照試料は、0.85～4.64 P_2O_5 mg/g、カルシウム含量が2.36～4.54CaOmg/g



第23図 SX22 遺構覆土の試料採取位置

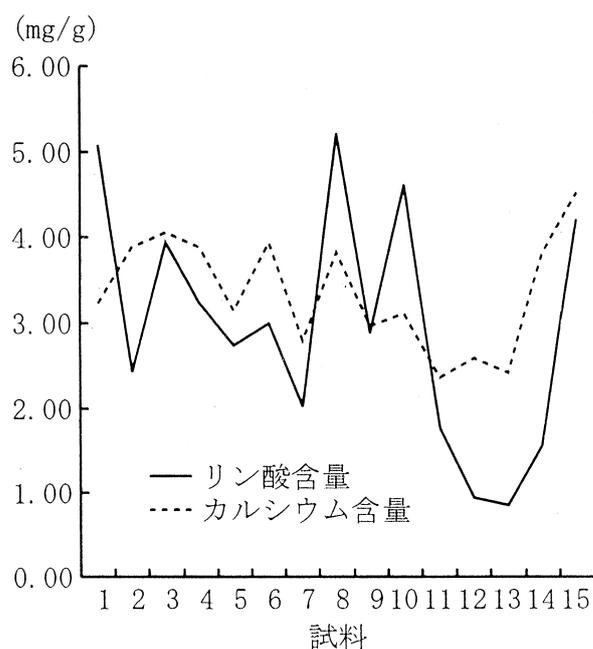
であり、両成分ともバラツキが特に大きい。

(4) 考察

今回分析した各試料のリン酸含量は、0.85～5.24P₂O₅mg/gであり、試料により差が認められる。一方、カルシウム含量は、2.36～4.54CaOmg/gであり、これも試料により差が認められる。カルシウムが土壌中に普通に含まれる量、すなわち天然賦存量は1～50CaOmg/gとされており（藤貫，1979）、含有幅が比較的大きい。ここで、試料間による両成分含量の変動をみると、ほぼ同様な動きを示している（第24図）。このことは、リン酸の供給源が動物質に由来する可能性があることを示している。ところで、リン酸の天然賦存量については、Bowen（1983）、Bolt & Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの調査例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.0P₂O₅mg/g程度である。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、5.5P₂O₅mg/gという報告例がある（川崎ほか，1991）。さらに、これまでの分析調査で骨片などが認められる土壌は、6.0P₂O₅mg/gを越える場合が多い。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一している。ところで、比較対照のために採取された試料のリン酸含量は、試料番号1・8～10・15が上記の天然賦存量の上限

に近い値もしくはそれを上回る値であったが、試料番号11～14が2 P₂O₅mg/g以下であった。これは、例えば農耕に伴う施肥や攪乱など、人為的な影響を反映した結果と推定される。これより、土坑埋土にも少なからず何らかの影響が及んでいる可能性があることを考慮する必要がある。

土坑埋土におけるリン酸含量は、対照試料と比較して測定値が低いものの、試料番号3・4・6にお



第24図 リン酸・カルシウム含量

調査区	番号	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)	備考
B地区	1	CL	10YR2/3 黒褐	5.01	3.23	SX22直近の検出面
	2	LiC	2.5Y4/6 オリーブ褐	2.44	3.90	墓壙SX22埋土
	3	LiC	10YR3/3 暗褐	3.95	4.07	墓壙SX22埋土
	4	LiC	10YR3/3 暗褐	3.22	3.88	墓壙SX22埋土
	5	LiC	10YR3/3 暗褐	2.74	3.15	墓壙SX22埋土
	6	LiC	10YR4/3 にぶい黄褐	2.99	3.96	墓壙SX22埋土
	7	LiC	10YR4/4 褐	2.02	2.79	墓壙SX22埋土
	8	LiC	10YR4/4 褐	5.24	3.82	SX22直近の検出面
	9	LiC	10YR4/4 褐	2.90	2.96	遺構付近の検出面
	10	礫含むCL	10YR2/3 黒褐	4.64	3.11	遺構付近の検出面
	11	LiC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	1.77	2.36	検出面より上層
	12	LiC	2.5Y4/3 オリーブ褐	0.94	2.60	遺構付近の検出面
	13	CL	10YR3/4 暗褐	0.85	2.43	検出面より上層
	14	LiC	2.5Y4/3 オリーブ褐	1.57	3.82	付近の耕作土
	15	CL	2.5Y3/2 黒褐	4.23	4.54	付近の耕作土

注1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

注2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

CL・・・埴壤土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂3～65%）

LiC・・・軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

第5表 リン・カルシウム分析結果

いて天然賦存量に近いもしくはそれを上回る。特に試料番号3は、直上で採取された試料番号2よりも高い値が得られている。すなわち、試料番号3のリン酸は、後代の影響をそれほど受けていない可能性がある。すなわち、土坑埋土には、外的要因によってリン酸が富化されたと考えられる。土壌の理化学成分は、自然状態において均質になる性質があるが、人為的な埋納が行われた場合、場所によって局在することが明らかにされている。以上のことから、SX22は、内部に何らかの動物遺体が存在しており、墓壙として利用されていたことが示唆される。

(パリノサーヴェイ株式会社)

〔引用文献〕

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
Bowen,H.J.M. (1983) 「環境無機化学 ー元素の循環と生

化学ー」. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen,H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements] .
Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M. (1980) 「土壌の化学」. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷 行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
土壌養分測定法委員会編 (1981) 「土壌養分分析法」. 440p., 養賢堂.
藤貫 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52, p.57-61, 地質調査所.
川崎 弘・吉田 滯・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
ベドロジスト懇談会編 (1984) 「土壌調査ハンドブック」. 156p., 博友社

2 SX22・SH16の¹⁴C年代測定

今回、SX22・SH16について¹⁴C年代測定を行った。結果は以下のとおりである。(中村俊夫)

試料番号	試料採取地区	遺構など	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (permil)	¹⁴ C age (BP)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代 (Stuiver et al,1998)* 上段：暦年代較正值 下段：±1σの暦年代範囲 (probability)	特記事項
1	B-	SX-22	-30.5	3167±34	Cal BP 3380 Cal BP 3443-3425 (22.9%) Cal BP 3407-3356 (77.1%)	墓壙, 縄文中 後期
2	B-	SH-16	-24.0	4870±30	Cal BP 5599 Cal BP 5643-5629 (24.9%) Cal BP 5613-5590 (75.1%)	竪穴住居, 縄文中 後期

第6表 三重県山添遺跡から採取された炭化材試料¹⁴C年代測定結果

〔第6表凡例〕

- ¹⁴C年代値はBPの単位で、西暦1950年から過去へ遡った年代値で示される。
- ¹⁴Cの半減期として、国際的に用いられているLibbyの半減期5,568年を用いて¹⁴C年代値を算出した。
- 年代値の誤差はone sigma (±1σ; 1標準偏差)を示した。これは、同じ条件で測定を100回繰り返したとすると、測定結果が誤差範囲内に入る割合が68回である事を意味する。誤差を表示の2倍 (±2σ; 2標準偏差)にとると、誤差範囲に入る割合は95回になる。
- $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ を用いて炭素同位体分別の補正を行った。すなわち、Conventional ¹⁴C age (同位体分別補正¹⁴C年代)である。
- *) ¹⁴C年代値から暦年代への較正は、樹木年輪についての¹⁴C濃度測定から得られた較正データを用いる。ここでは、INTCAL98較正データ (Stuiver, M. et al, 1998, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083) と較正プログラムCALIB Rev 4.3 (Stuiver & Reimer, 1993, Radiocarbon, 35, 215-230) を用いて較正を行った。
- *) 暦年代は、¹⁴C年代値が、¹⁴C年代値-暦年代較正曲線と交わる点の暦年代値、および真の年代が入る可能性が高い暦年代範囲で示される。また、真の年代が、表示されたすべての範囲のどれかに入る確率が68% (1σ)である。年代範囲の後に示された確率は、68%のうちで、さらに特定の年代範囲に入る確率を示す。また、確率が5%より小さい場合には記載を省略した。

VI 結 語

1 竪穴住居と墓との関係

櫛田川中流域には縄文時代の全時期にわたり多くの遺跡が存在する。今回調査を行った山添遺跡の周辺においても、松阪市では射原垣内遺跡・鴻ノ木遺跡・多気町では坂倉遺跡・新徳寺遺跡などがあげられよう。

縄文集落の形態として環状集落がよく知られているが、三重県を含め近畿地方でそのような事例は多くない。環状あるいはそのような形態に近いものとしては、縄文時代後期の名張市下川原遺跡や土壙墓群が環状に配されている縄文時代晩期の滋賀県土田遺跡^①などがあてはまるのではないだろうか。このようにある程度の規模がある集落では竪穴住居が集中する居住域と墓的な遺構（土壙墓・埋設土器など）が集中する墓域が分離する傾向がみられる。

山添遺跡では竪穴住居を1棟検出しただけである。トレンチ調査であるためこれがすべてではないが、鴻ノ木遺跡や坂倉遺跡を除き、三重県においては数棟を調査時に検出する例が多い。また、それらとともに住居付近で墓を検出することが多い。例えば新徳寺遺跡は縄文時代後期の6棟の竪穴住居を検出し、土器型式でみれば同時期と考えられるものはより少なくなるが、住居跡付近で墓と考えられる遺構である埋設土器6基や土壙墓2基を検出している。埋設土器はすべて屋外埋設であり、土壙墓については遺構のほぼ中央に遺構検出面とほぼ同レベルでまるで墓標のような人頭大の川原石を確認している。山添遺跡においても同様の形態の土壙墓（SX22）を確認しており、このような形態の土壙墓が存在するのであろうか。地域毎での確認作業が必要となろう。

新徳寺遺跡の遺構配置を概観してみると、竪穴住居と埋設土器の位置関係について一つの傾向がみられる。竪穴住居を中心にして概ね10～15mの円内に埋設土器がみられるという傾向である（第23図、SH59とSZ45・47・48）^②。同様の傾向を示す事例としては、中期後半に属する芸濃町大石遺跡、後期前半に属する北勢町覚正垣内遺跡、名張市中戸遺跡（第23図、SB25とSX18・

SX27）、同市下川原遺跡などでも同様の傾向がみられる。

今回の調査において、縄文時代中期と考えられる竪穴住居と土壙墓を検出した。遺構内から出土した土器については、土器型式の若干の違いはあるもののほぼ同時期の遺構と考えてもよいのではないだろう。山添遺跡のSH16とSX22も先述の傾向にあてはまるものと考えている。

先にも述べたように、ある程度の規模の集落では竪穴住居が集中する居住域と墓的な遺構（土壙墓・埋設土器など）が集中する墓域が分離する傾向がみられ、数棟を調査時に検出するような小規模の集落については、竪穴住居（居住空間）から意識できる範囲内に、土壙墓・埋設土器などの墓的な遺構を配置することが考えられるのではないだろうか。このことは、縄文時代の集落構造の問題点を含んでいるものであり、今後の研究の進展を待つとともに課題としたい。（小濱 学）

〔註〕

- ① 本田 洋 「縄文時代晩期の土器棺墓群が検出される」（『滋賀埋文ニュース 第224号』 滋賀県埋蔵文化財センター 1998年）
- ② 小濱 学 「土壙墓・埋設土器～新徳寺遺跡検出例を中心に～」 『関西の縄文墓地－葬り葬られた関西縄文人－発表要旨集』 関西縄文文化研究会 2000年）

〔参考文献〕

- 千葉 豊ほか 「IX 中戸遺跡」（『昭和61年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告I 本文編』 三重県埋蔵文化財センター 1989年）
- 森川幸雄ほか 「III 大石遺跡」（『平成3年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊』 三重県埋蔵文化財センター 1992年）
- 清水弘之 「IV. 覚正垣内遺跡」（『一般国道475号東海環状自動車道埋蔵文化財発掘調査概報III』 三重県埋蔵文化財センター 1997年）
- 門田了三 『下川原遺跡5次調査概要』（名張市遺跡調査会 1997年）

『縄文時代集落研究の現段階』（縄文時代文化研究会
2001年）

2 調査のまとめ

今回の調査では中世の遺構をはじめ、縄文時代・古墳時代・奈良時代の遺構や遺物を確認した。ただし、調査した4つの地区で様相は異なる。ここでは各地区の特徴を概述し、それをもって調査のまとめとしたい。

A地区では、15世紀後半～16世紀初頭にかけての井戸や溝などを検出した。この地区は昭和53年度に県道改良工事に伴って行われた発掘調査区の西方約120mのところの位置する。そのときの調査では住居跡や石組遺構（水留跡）、井戸、溝など中世の遺構が確認されている^①。出土遺物から今回検出した遺構とほぼ同時期に存在したと思われる。石組の遺構や住居跡はA地区では確認できなかったが、溝は東西方向に流れており、前回調査で検出したものの続きである可能性が考えられる。以上のことから、この時期の集落はA地区から東や南方向に向かって広がっており、現在の山添の集落部分とほぼ重なるものと考えられる。

B地区では、縄文時代中期の竪穴住居や土壇墓、中世の溝などを検出した。また時期は不明であるが、調査区の南部西壁際で石組遺構を確認した。これは、昭和53年度の調査で確認された石組遺構との関連も考えられる。また、B地区は調査区の北部が南部に比べて高くなっており、この微高地上で縄文時代の遺構や遺物が確認できる。平成13年度にも同事業に伴い調査を行っており、中世や古墳時代の遺構をはじめ、縄文時代前期の竪穴住居を2棟、土坑を6基検出している^②。縄文時代の集落が、B地区の北部から微高地上に広がるものと思われる。この時期の遺構が確認できるところには、黒褐色土の層が認められる。

C地区では、調査区の東側で主に遺構を検出した。遺構は主に奈良時代のものであるが、南北方向に長い調査区から5世紀後半～6世紀初頭頃の埴輪片が出土していることが特徴である。当地は安楽町字車塚に所在し、明治18年当時の地籍図^③によると古墳らしきものが確認できる。また、松阪市遺跡番号

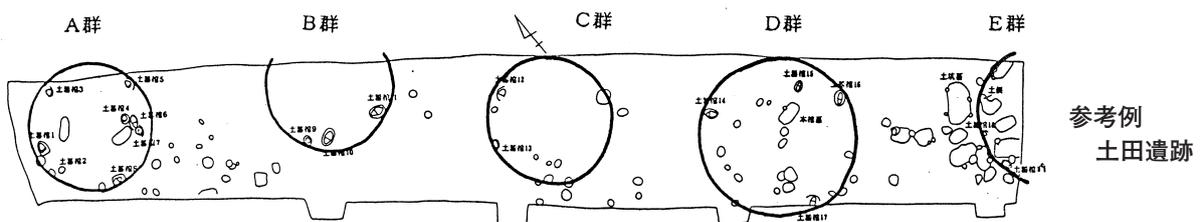
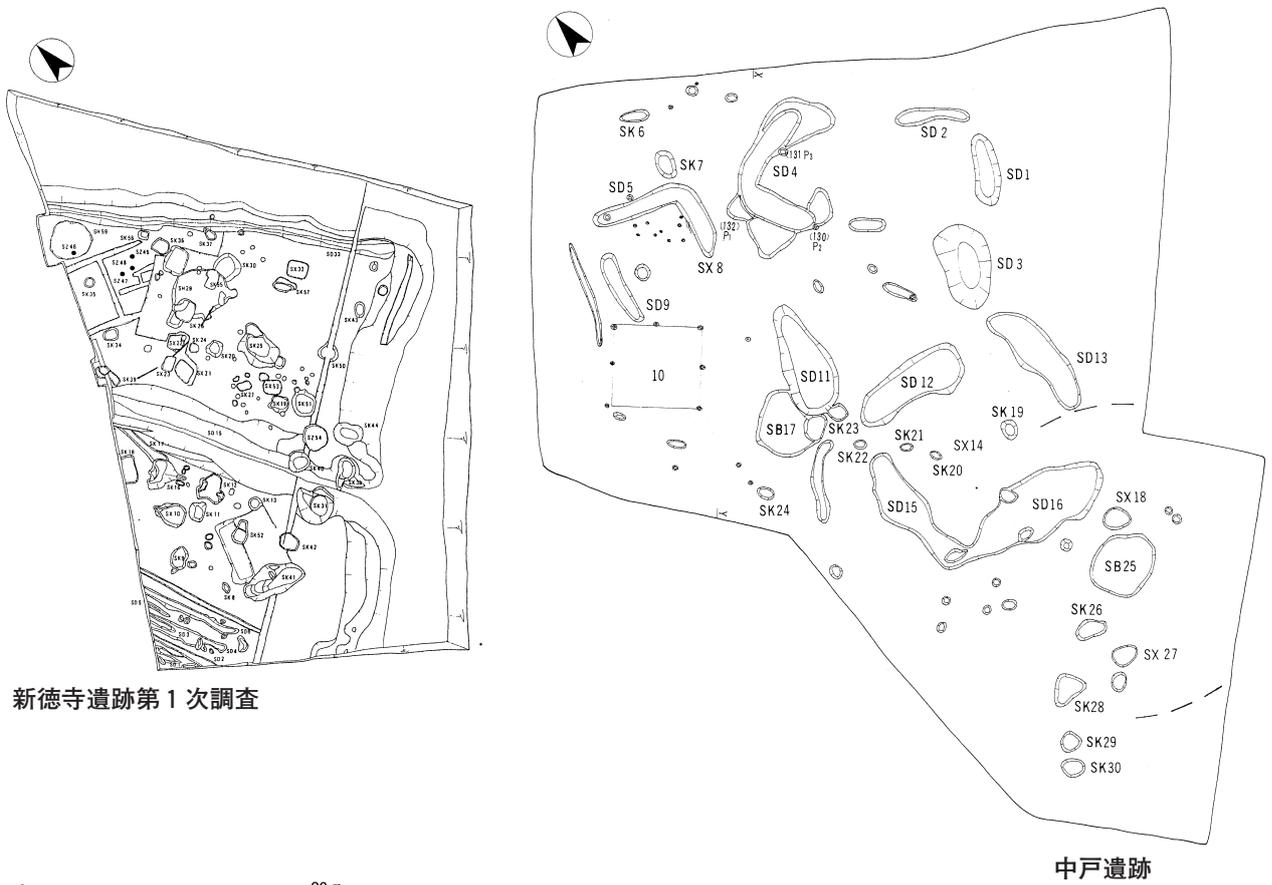
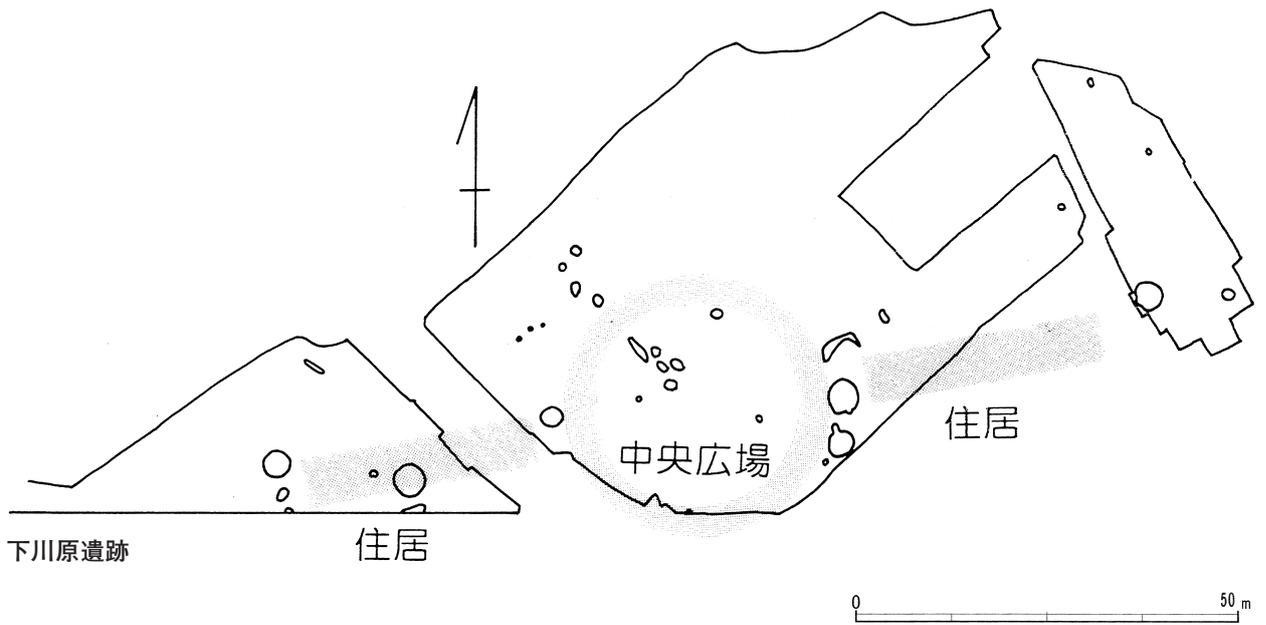
353、『金の車塚』として包蔵地カードや遺跡地区に記録が残っている。包蔵地カードには、「安楽天神より西南約200mの水田地帯にあるため、耕地整理のために消滅す。倭姫命が天照大神の御魂を曳き奉りて此地まで来たり。その車を埋められし塚なり」と文献にあり。」という概要説明がなされている。今回出土した埴輪片が、この『車塚』に関連するものである可能性が考えられる。

D地区は、ほぼ現在のU字溝に沿って東西の調査区が設定されているので、ほとんどが攪乱溝である。山裾で根石をもつピットが柱列状に確認できたが、性格は不明である。

今回の調査は限られた水路部分のみの線的調査であるため、遺跡の全容・性格などを考察することは非常に困難であるが、各時代に特徴的な状況は確認されたと考えられる。
(柴山圭子)

〔註〕

- ① 新田 洋 『山添遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1979年）
- ② 『平成13年度 三重県埋蔵文化財年報』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）
- ③ 『松阪市史 別巻一 松阪地区集成』（松阪市 1983年）



第25図 縄文集落の遺構配置 (1:500,下川原遺跡は1:1,000)



A地区 調査前風景（北から）



A地区 調査区全景（南から）

図版 2



B地区 調査前風景（西から）



B地区 調査区全景（北から）



C地区 調査前風景（東から）



C地区 調査区全景（西から）

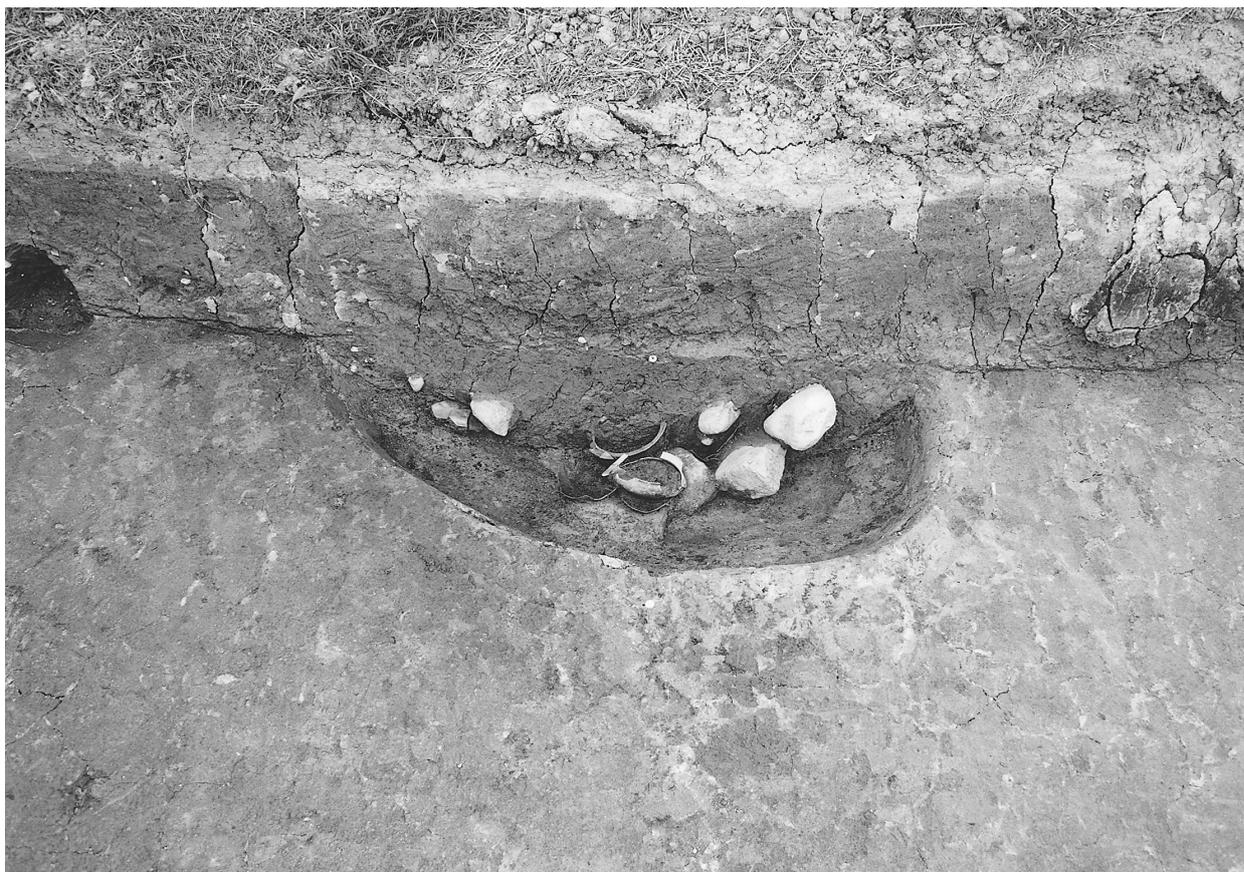
図版 4



D地区 調査前風景（東から）



D地区 調査区全景（東から）



SE 5 出土状況 (東から)



SE 5 出土状況 近接 (東から)

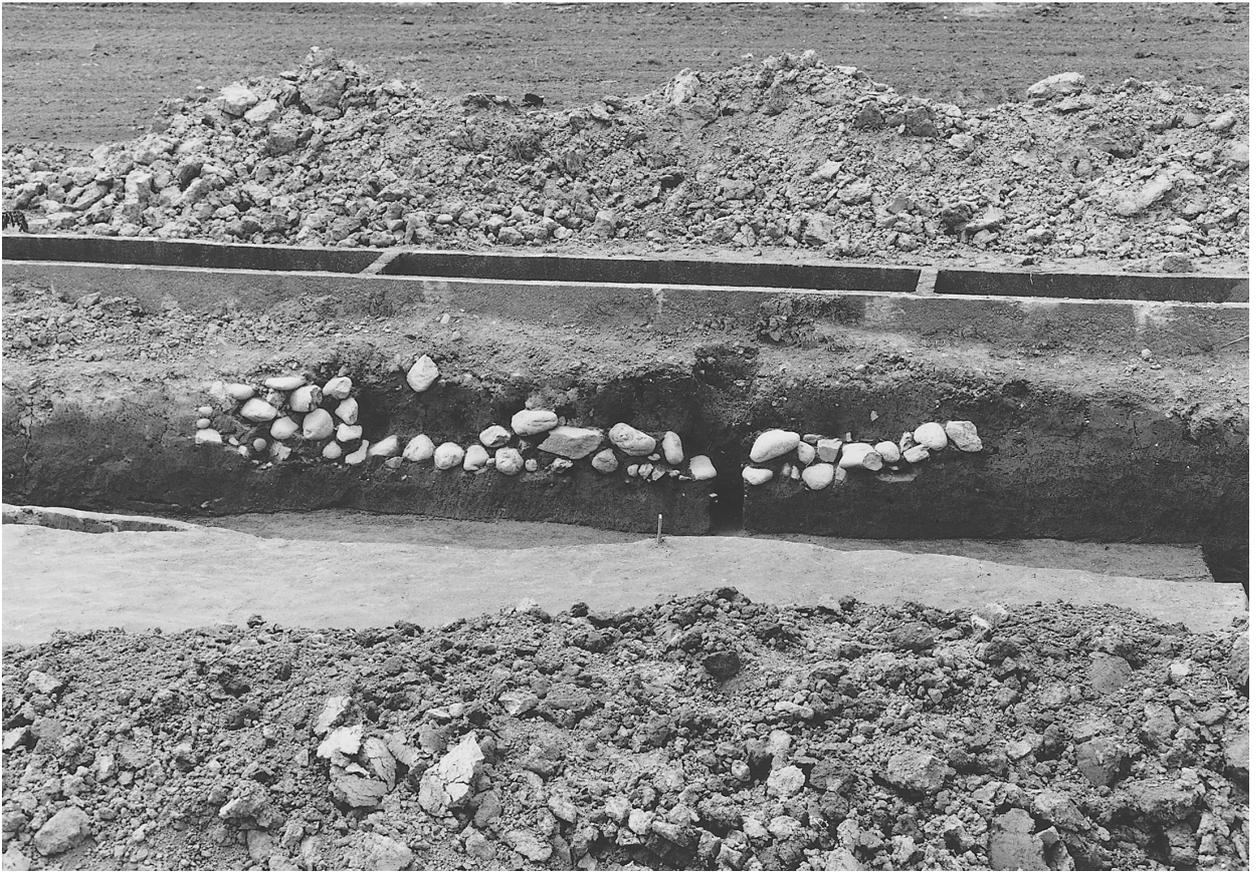
図版 6



S H 2 2 (北から)



S X 2 2 (西から)



石組遺構 (東から)

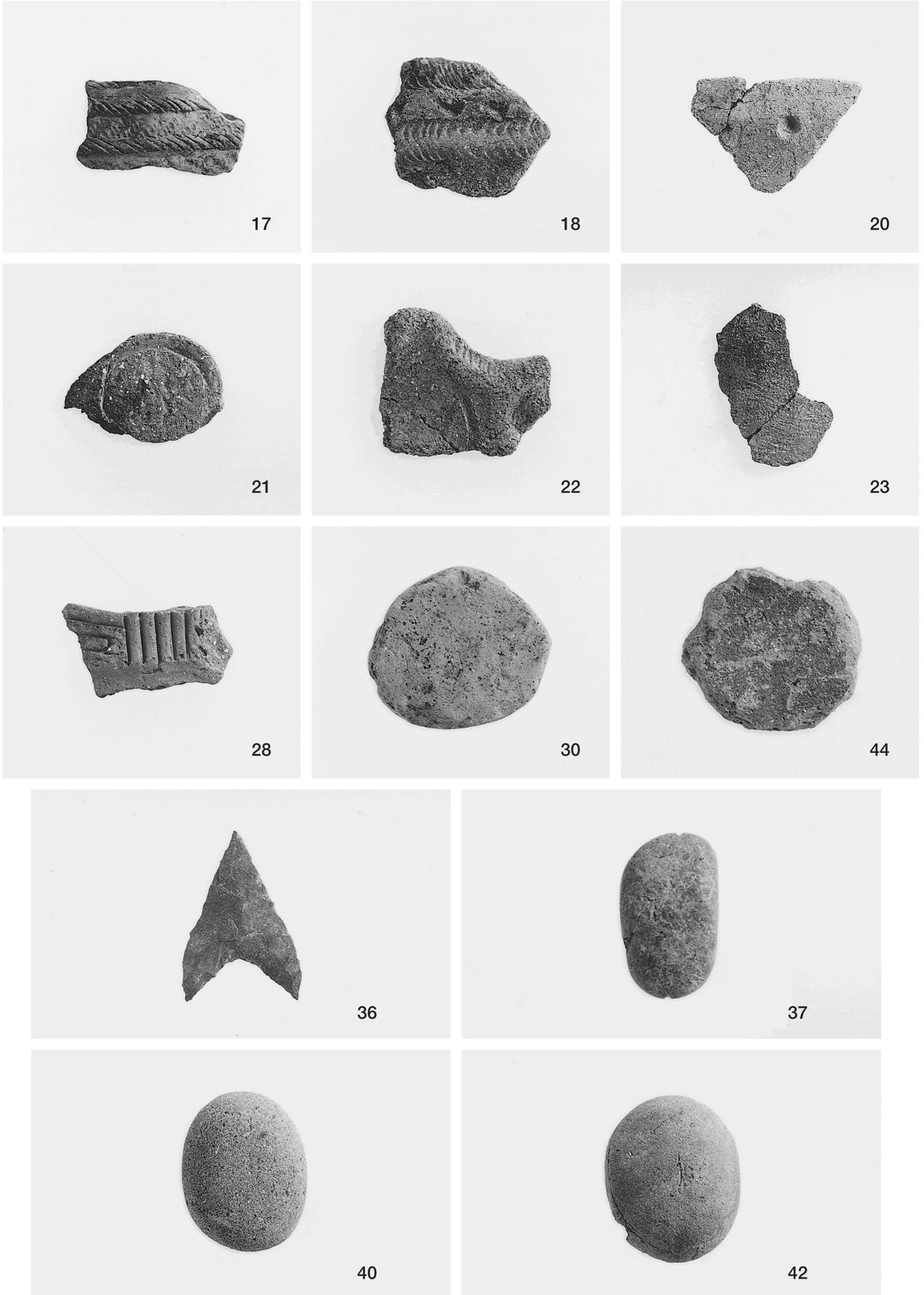


SA 45 (北から)

图版 8

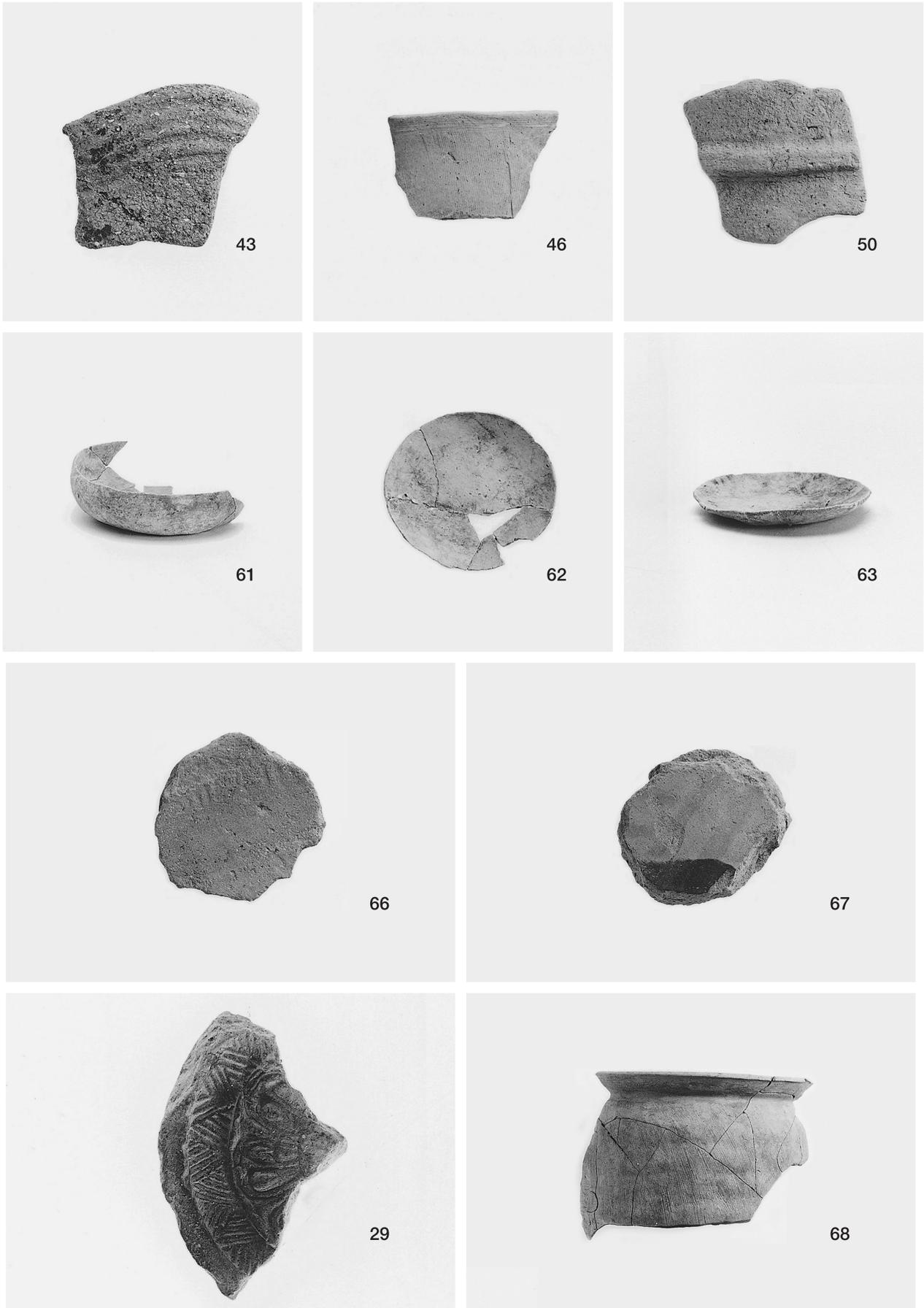


A地区 出土遺物



B地区 出土遺物

図版10



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やまぞえいせき (だい3じ) はくつちようさほうこく							
書名	山添遺跡 (第3次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	243							
編著者名	柴山圭子・小濱 学							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
やまぞえいせき 山添遺跡	まつさかし 松阪市 あんらくちよう 安楽町 ほか	204	352	34° 31' 56"	136° 34' 28"	2000.06.19 ~ 2000.10.17	1,700	平成12年度県営 ほ場整備事業 (櫛田上地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
山添遺跡	集落跡	縄文時代中期 奈良時代 中世	竪穴住居・土壙墓 溝 柱列・井戸・土坑・溝 など	縄文土器・石鏃 軒丸瓦 土師器				

三重県埋蔵文化財調査報告 243

山添遺跡（第3次）発掘調査報告

～三重県松阪市安楽町・山添町所在～

2003年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 文化印刷
